

訳註 ヘーリアント（救世主）

〈第7歌章—第10歌章〉

石 川 光 庸

以下は9世紀前半に古低ドイツ語（古ザクセン語）で著わされた宗教叙事詩Heliand「救世主」全72歌章の、第7歌章から第10歌章、537行から858行までの翻訳と註釈である。訳註の基本方針は第6章までを扱った前著（『古ザクセン語 ヘーリアント（救世主）』2002年 大学書林）と変わらず、翻訳はできるだけ原文に忠実に、註釈は語源・語誌的記述を中心とした。ただし本稿では前著よりも『ヘーリアント』詩人独自のキリスト伝編集視点や独特の表現法を見出そうと努めたつもりである（多くは★で扱った項目）。

紙数の都合上、本稿には原文をのせなかったが、テキストはATB,Nr.4のHaliand und Genesisの10版（1996）であり、註釈に使用した参考資料類も上述の前著に掲げたものと同じである。前著と合わせても全体の1/7強にしか過ぎないが、ゲルマン語最古かつ最大の頭韻詩型によるキリスト伝を直接原文で読もうとする方々には、恰好の手引となり得ると思う。ここまでするまでを通読されれば後は独力で読み進められるであろうから。

〈第7歌章 東方の三博士の到来〉

清らかな心の人はいだれであれ 537

キリストのことを知ったのに、王の宮廷にあって

救い主に対する良き思いを 心の中にいだかぬ男たちには

この話は伝わらなかった。そこで彼らにはこの出来事の一切が、 540

言葉においても行為においても 知られぬままであったのだが、

遂にある日、東方からの男たちが、たいそう学識すぐれた
立派なもののふ三人が、この人々のところにやって来た。

長い道のりを はるばると国土を横切って。

ひとつの輝くしるしの後をたどって 神の御子を 545

清らかな心で探し求めたのだ。御子の前にひざまづき、

弟子として仕える決意を述べようと望んだ。神の定めたようにしたのである。

そして彼らが 権勢豊かなヘロデ王に、

言葉もとげとげしく 腹立ちやすき大王に

廷臣居並ぶ大広間で拝謁した時 ―この男は常に殺戮を好んだ― 550

彼らは王に対して当然あるべきように うやうやしく、

その広間の王の前にへり下った態度で 挨拶をした。すると王は

いかなる大事が このもののふたちをはるばる遠く

つらい異国へ旅立たせたのかと問うた：「そなたたちは誰かへの

みやげとして黄金細工をたずさえておるのか？ 何故にはるばる 555

ここまでやって参ったのか？ はて、いずことも知れぬ遠い異国の

つわものたちであろうが。 見るところそなたたちは高貴な生まれ、

良き一族の出であるようだ。 わが国にはいまだかつて異国から

そなたたちの如き使いが参ったことはない、わしがこのもののふどもを、

この広大な国を治めるようになって後は。 そなたたちはここに居並ぶ 560

勇士たちの面前で、 何故にこの国に参ったかわしに真実を語るがよい。」

そこで答えて 東方からの男たち、

言葉に長じた者たちは言った：「私どもはあなたさまにいささかの

隔意もなく、 私どもの意図のほどを申しあげることが

できます、 何故にこの地の東のかなたからはるばる御地へ 565

参りましたかを。 かつて気高い方々が居られました。

良き言葉を語る人々で、 私どもに多くの良きことを、

天の帝のお救いについて 真実なる言葉をもって

約束してくれたのでありました。 その中にもひとりの賢者は

老熟にして多識であり、―これははるか昔のことであります― 570

この地から遠く東の国において私どもの先祖でありました。 かつて誰も

彼の後にこれほど言葉に敏かったためしはありませんが、 彼が神の

御言葉を伝えたのです。 というのも、人々の主である御方が、

この大地に居ながら 天の全能の神の御言葉聞きとる力を
 彼にお与えになっていたからです。 それゆえに神に仕えるこの者の 575
 知恵も考えも広大でありました。 さてこの方が自分の家屋敷も、
 多くの一族の者たちも、 人の世の楽しい営みをも
 捨て去って 別の世の光を求めて旅立つことになった時、
 彼は弟子たちや 相続人たちを自分のそば近く呼び寄せ、
 その立派な男たちに向かい 真心こめて 580
 語ったのです： ―その後、に事実この世にやってきたすべて、
 出現したすべてのことを。 彼はこう言いました、賢明なる王者が、
 名高く力ある王が、 最も良き家に生まれた御方がこの人間界に
 来られるだろうと。 また言うには、それこそ神の御子であると、
 更に言うには、彼こそこの世界を、 天をも地をも 585
 永劫にわたって 治めるであろうと。
 また言うには、その聖なる御方を 御母がこの人の世に
 生み出された 正にその同じ日に、
 （と彼は言うのです） 東のかなたに一箇の輝きが現れる、
 白い天の星が。 それは、いまだかつて私たちのだれもが天地の間に、 590
 ここであれ、 また他のいずこであれ、体験したことのないもの、
 そのような子も、そのようなしるしも。 そして彼はお命じになりました：
 御子を拝礼しに一族の中から三人の者が旅立つようと。 彼らはいつもとよく気
 をつけていて、
 東から神のしるしが 現われて空に昇るのを
 見たなら、すぐさま旅の支度をせよと、 彼は命じたのです、そして 595
 私たちは、彼に命じられたのです、 そのしるしが前方に現われて
 この世界の西のかなたへ進むのに従うようと。 神の御力によって
 このすべてが本当であったとわかりました： 王者がお生れになった
 のです、勇敢で強い王が来られました。 私たちはその方のしるしが
 天の星々の中から明るく輝くのを見ました、 聖にして力ある主が 600
 みずからそうして下さったと私にはわかります。 朝ごとに私たちは
 あの明るい星が大きく輝くのを見、 そしてその後を慕って御当地まで
 道をたどり森をも越えてずっとやって参りました。 私どもみずからが
 この御方にお目にかかることができたなら、この帝国のどこにこの王がおられるか

知ることができたら、これに勝る喜びはありません。 どの一族から
 お生まれになったのか、 お教えくださいませ。
 するとヘロデの 胸の内に
 心のあたりに苦悩が生まれた； 彼の思いは波立ちはじめ、
 愁いが心にあふれた。 なにしる彼は聞いたのだから、
 自分の上に 主君ができたということを、
 貴い生まれの もっと権勢ある王者が
 もっと幸いに恵まれた王が 彼の民の中にいますことを。
 そこで彼はエルサレムにあらん限りの 良き男たち、
 弁舌の術に最も秀でた人々、 胸の中にまことに多大の学識を
 たくわえている 賢き人々のすべてを
 呼び集め、 はっきりと口に出して尋ねたのであった、
 敵意に満ちたこの男、 この人々の王は
 大いなる熱意をこめて、 いったいどこにキリストは、
 平和をもたらす御方たちの 最善の人はこの世界の
 どこに生まれることになっているのかを。 すると人々は答えて
 本当にこのように言ったのである： 自分たちは良く知っているのだが、
 キリストはベツレヘムでお生まれになるはずである、「私どもの聖なる書物に
 そのように書かれてあるのです、 予言者たちが、
 かくも賢い人々が、 神の御力によって
 あのかの多くの知恵をそなえた人々が、 かつてこう語ったそのように。
 すなわちベツレヘムから 町々の守り主であり、
 この国の慕わしき支配者たる御方が この世の光の中に現われると。
 力強き裁き手にして主である御方が。 この方こそユダヤの民を
 正しく治め、 この地上世界の多くの民に
 まことに寛大に 恩賞を分け与えてくださるのだと。」

（福音書その他との対応） 537 - 541 行は自由補足。541 - 561 行は「マタイ」2 章 1 節と 2 節
 にもとづき、Hrabanus の註解を援用して敷衍、562 - 597 行は同 2 節と Hrabanus にもとづ
 く膨大な敷衍、597 - 605 行は同 2 節そのもの、606 - 611 行は同 3 節、611 - 619 行は同 4 節、
 619 - 628 行は同 5 節と 6 節（それぞれ Hrabanus を多く援用）、628 - 629 行は自由補足。
 [Tatian との対応] 8 章 1 節から 3 節まで。

第7歌章 註解

537) **Thoh** : 副文を導く従属接続詞（英[al-]though）。定動詞は接続法となる（antkendi）。次行の並列接続詞 **thoh**（独 *doch*）と結んで「…であるのに、しかしながら」の意。**gihuiliic hêlag man** : 第6歌章のシメオンをはじめとする信仰篤い人々のこと。539行以下の宮廷周辺の心正しからざる人々に対比。

538) **antkendi** : 接続法過去。過去の事象を表わす。 **hobe** : *stm. hof*「宮廷」（独 *Hof*）の単数与格。「高い」**hoh**（独 *hoch*, 英 *high*）と同根で、「（安全性や快適さの故に）高みにある家や庭」が原義。古ノルド語や古英語では「神殿」をも意味した。英語においてはアングロ・サクソン時代の終焉とともに仏語系の *court* に取って代わられた。

539) **gimârid** : *swv. mârïan*「告げ知らせる」の過去分詞。269、535行に既出の *adj. mârï*「名高い、立派な」と同系。この語の原義は「大きい、立派な」と思われ、したがって「大言壮語する」の意ともなる。独 *Mär-chen*（原義は「名高い話」）や人名 *Diet-mar*（「立派な、名高い戦士」）などに残る。 **im** : 前行の *Krist* 次行の *hold*「（ある人に）好意をいдаく」と結ぶ。**môdsebon** : 241、386行に既出の *môd-sebo*「胸中、心中」の単数与格。

540) **holde** : *adj. hold*（独 *hold*）の複数主格。 **bihaldan** : *stv. (VII-1) bi-haldan*「保持する（独 *be-halten*）」の過去分詞であるが、既に435行で見たように「隠されたままでいる」の意が強い。

★ ここまでは *Tatian* や註解書にもない自由補足。東方の三博士登場までの「つなぎ」の役を果たしている。

541) **ôstan** : *adv.*「東方から」。 *than-an*（276行他）「そこから！」と同じく由来を示す接尾辞 *-ne* による造語。ちなみに方向を示す接尾辞は *-ar* で、*ôstar*, *thar* など（独の地名 *Öster-reich* に残る）。現代独 *Osten* はこの *adv.* が名詞に転じたもので、無語尾の *Ost* は更に新しく15世紀頃から。この語の原義は「明るくなる」で、ギリシャ語 *eôs*、ラテン語 *aurôra* と同根である。

543) **snelle** : < *snel*「勇敢な」。現代独 *schnell* への意味推移については202行註を参照。

★ 東方の三博士を *thegnos snelle*「勇猛なものふ」と称するのは適切でない。頭韻の必要性もないのであるから、*snel* を用いたのは、まだゲルマンの感性を強く保持していたザクセン人聴衆の耳になじみ深い表現を思わず使ってしまったと考えられる。後にシモン・ペテロが剣を振る箇所（「ヨハネ」18-10）でもペテロは *snel suerdthegan*（4866行）、*thegno snellost*（5027行）と呼ばれている。

544) **uueg** : *stm.*（独 *Weg*, 英 *way*）ゲルマン共通語で原義は「動くこと」（独 *be-wegen* などに原義が残る）。一般的な「道路、道のり」にはこれを用い、広い舗装路にはラテン借用語の *strâta*（独 *Straße*, 英 *street* ; 原形は *via strâta*「人工的に敷設した道」）を用いるという区別は、既に「ヘーリアント」にも定着している。

545) **folgodun** : *swv. folgon*「従う」（独 *folgen*, 英 *to follow*）の過去3人称複数。主語は東

方の三博士。 **ēnun** : 不定冠詞ではなく、数詞 *ēn* の中性与格と考えるべきであろう。この時代、不定冠詞は未発達であった。 **bōkne** : *stn.* *bōkan* 「しるし、前兆」(英 *beacon*) の単数与格。373行に既出。 *berht bōkan* 「輝くしるし」とは「マタイ」(2,2と9)の「東方の星」のこと。

546) **hnigan** : *stv.* (I) 「身を傾ける；拝礼する」(独 *neigen*)。方向規定の *adv.* *tō* と与格名詞をともなって「…に拝礼する、おがむ」。

547) **gehan** : *stv.* (V) 「言明する；(人の与格とともに) ある人の説を信奉すると表明する」。ここでは *te iungrun* (*jungaro* の複数与格) をともなって「自分を弟子として名乗る」の意。*gehan* の原義は「口に出して言う」で、中高独語 *jehen* までは一般的だったが、後に *sagen* によって取って代わられた。古くから宗教・法律的色彩を帯びていたらしく、たとえば独 *Beichte* 「告解、さんげ」は *bi-jiht*, *bi-giht* が原形で、「聴聞僧のもとではっきりと言明すること」だった。また *Gicht* 「痛風」も同根で、魔女などが「口に出して呪うこと、呪詛」によって生ずる病と考えられたからである。この点で日本語の「宣る、祈る、罵る、名乗る、祝詞」などの根にある「のる」(= 声に出して言う) とよく似た語である。 **dribun** : *stv.* (I) *dribun* 「おこなう、実行する」(英 *to drive*, 独 *treiben*) の過去複数。与格の再帰代名詞 (*im*) をともなう。 **giscapu** : 複数対格「(神の) 定め」。127行に既出。

548) **Erodesan** : 人名 *Erodes* 「ヘロデ」(原義は「英雄的な者」) の弱変化対格。弱変化は対格にのみ表われている。イエスの誕生当時のユダヤの王だった大王 (BC37 - AD4) で、残忍なことで知られた。なおアクセントは *-ró-* にあるが、これについては60行註を参照。

549) **seli** : *stm.* 「広間」(独 *Saal*) の単数与格。229行に *win-seli* 「ワインを飲むための広間、客間」として既出。 **slīduurdean** : *adj.* *slīd-wurdi* 「邪悪な言辞の」の男性単数対格。*slīdi* 「邪悪な」はゴート語にも登場するが (*sleips*)、語源不詳。古ラテン語 *stilis* 「不和」や独 *leid* と関係づける説もある。*-wurdi* は *stn.* *word* (英 *word*, 独 *Wort*) から作られた *adj.*。

550) **mōdagna** : *adj.* *mōdag* 「怒りっぽい、興奮性の」の男性単数対格。頻出する名詞 *mōd* 「心、気分」の *adj.* であるが、独立した *adj.* としてはこの例のように「怒りや敵意を帯びた」という狭い意味に限定されて用いられる。(これに反し接尾語としての *-mōdag* は「…の気分の」)。名詞はゴート語 *mop*、古ノルド語 *móðr* などにおいて「気分」より「怒り」の意味が濃いので、古ザクセン語 *mōd* も元来は「怒り、興奮」が主たる意味だったと思われ、その証拠のひとつがこの *mōdag* ではなかろうか。 **mordes** : *stn.* *mord* 「死；死刑」(独 *Mord*、英 *murder*) の単数属格 (*adj.* *gern* が属格目的語を要求するため。92行註参照)。 *mord* はラテン語 *mors*, *morī* などと同根。

★ ヘロデの邪悪さや、殺人や処刑を好んだことは *Tatian* や諸註解にはなく、後の幼児殺しの伏線として、また聴衆の緊張感を高めるために詩人が工夫したものであろう。

551) **quaddun** : < *quedan*. **eūsko** : *adv.* 「うやうやしく、へり下って」。ラテン語 *cōnscius* 「(自分の罪を) 意識している、後めたい」は早い時期に南西ドイツの修道院の言語に *kūski*

として取り入れられ、次いで北部の古ザクセン語に、そしてそこから更に古英語 (cūse) にまで至った。古高独 kūski, 中高独 kiuschまでは「へり下った、道徳的な、貞節な」という多義語であったが、現代独 keuschはもっぱら性的貞節に意味が限定されている **cuninguisun** : *st/swf. kuning-wisa*「王侯にふさわしい行儀、行動」の単数与格。wisaについては288行註を参照。

552) **flettie** : *stn. fletti*「広間、客間」(♀英 flat) の単数与格。150行に既出。

553) **sie** : 複数対格。 **ûta** : *adv.*「外へ、外国へ」。 **gibrāhti** : (gi)bregianの接続法過去3人称単数。現代独語のような接続法完了形はこの当時未発展。

554) **uuracsid** : *stm. wrak-sid*「国外追放の旅、異国への行路」の単数対格。wrakは「追いつく、迫害する」を原義とし(ラテン語 urgeōも同根)、英 to wreak, 独 rächen「復讐する」、英 wreck「難破」などに残る。sid「道、旅」は122行に既出。wrakの原義から wrak-sidは『ヘーリアント』において楽団追放やユダヤ人の国外離散 Diasporaについて用いられ、単なる「異国の旅」はこの1例のみ。——むしろここにおいても「国外追放者のような辛い旅」という含意を感じるべきであろう。eli-lendi「外国の」が elend「みじめな」に変化した(345行註参照)のと同じ発想がここにも認められる。

★ 更には、ちょうど『ヒルデブラントの歌』Hildebrandsliedにおけるような、国外追放の勇者の帰還に際して国境で生じる緊張と悲劇といったゲルマン族が愛好したテーマが、『ヘーリアント』詩人の語り口にこのような表現を取り込ませたのかもしれない。聴衆に対するある種のサービスとも言えよう。

huueder : hwedar 疑問接続詞「…か(どうか)」(英 whether)。元来は疑問代名詞で「二者のうちの一方」を表わしたが、後に「…か、…か」という選択の疑問詞に転じた。現代独 weder も同語源だが、現今の意味は元来ついていた否定辞の ni が脱落して生じたものである。

lêdiad : *swv. lêdian*「導く、ともなう；(献上物を)持参する」(英 to lead, 独 leiten)。154行に初出の *stv. lidan*「行く」の使役動詞。 **uundan** : wundan, *stc. windan* (415行既出)の過去分詞「曲げられた、編まれた」。金や銀をねじり編んで腕輪や指輪などを作ることを windan と言う。「編まれた黄金」は『ベーオウルフ』や『ヒルデブラントの歌』などの古歌謡にしばしば見られる表現。ゲルマン人が愛好した財宝の代表が金銀の腕輪・指輪類だった。

555) **te gebu** : 「献上物として」。 gebu は *stf. geba* の単数与格。 **huilicun gumono** : 「もののふたちの誰かに」。 hwilcun は単数与格。 **te huī** : 「何のために、何故に」。 hwi は hwat の具格。 **thus** : *adv.*「このようにして」(英 thus)。明確な語源は未詳。 **ganga** : < *stm. gang*「行程、道のり」(独 Gang) の単数与格。an ganga で「旅をして」。 **gifaran** : kuman と結ぶ過去分詞「旅をしてやって来る」。独 gefahren kommen などと同構造の最古例のひとつ。一般的には gangan kuman のように不定形である。もっともこの gifaran をも不定形と解することも十分可能であり、正にこのような gi- のついた不定形と過去分詞とが同形のケースか

ら、現代独語の用法は発生したのである (503 行註を参照)。**fôdiu** : *stn.* fâdi 「道、行路」 (独 Pfad、英 path) の単数与格。語源不詳。an fôdiu で「道をたどって」ほどの意。なお「足」は fôt で fâdi と関係はない。**huat** : hwat、疑問代名詞ではなく問投詞と解すべきだろう：「実に、まことに」。現代の低独語でも wat! はよく感嘆詞・問投詞として用いられる。**nêthuanan** : = nêt-hwannan < ni wêt hwannan 「私の知らぬいずから」 (独 [ich] weiß nicht von wannen)。ほとんど *adv.* と化した省略文。

ferran : *adv.* 「遠くから」。*adv. fer* 「遠く」 (独 fern、英 far) に「…から離れて」の意の接尾辞-an(e)のついたもの。前の hwannan もこの接尾辞を持つ。実は現代独の fern も、本来の古高独語 ferro、中高独語 ver(re) にこの接尾辞がついた「遠くから」 (ferrana, verren) が、新高独語期に「遠く」の意に転用されたものである。**gisihu** : < gisehan。

ediligiburdiun : *stf.* ediligiburd 「高貴な生まれ」の複数与格。具格機能を帯びた与格である点、65 行の例と同じ：「高貴な血筋をそなえた者で」。

558) **cunnies** : *stn.* kunni のいわゆる述語的属格。**fon cnôse gôdun** : gôdun は弱変化とも強変化とも取れる。**cumana** … **wurdun** : 94 行註を参照 cumana は過去分詞 cuman の男性複数主格形で、*adj.* としての意識が強いことを示す。

559) **êri** : *stm.* êr 「使者」の複数主格。ゴート語 airus 以来の古語。121、282、553 行に既出の ârundi 「用件、使い」 (英 errand) と関連することは確かだが、それ以上の語源は不明。**thesas erlo** (複数属格) **folkes** : 次行の rikeas とともに、giuualdan の属格目的語。

560) **te uuârun** : 「本当に、いつわりなく」。*stn./f.* wâr の慣用表現。wârun は複数与格。

561) **thesun** : these の中性単数与格。thesumu, thesum, thesamo などの形が見られる。**liudio folk** : liudi はラテン語 liber と同根で「自由民である男、自分の武器をもって戦う独立した戦士」が原義、folk はラテン語 plebs, populus と同根で「軍勢、戦士集団」が原義であることは、6 行と 61 行の註で述べた。どちらも非常に戦闘的含意が強い。この箇所では「家臣団」ほどの意。**bihuui** : = tehwi (176 行に既出)。**sin** : wesan の接続法現在複数。

★ 554 行から 561 行までのヘロデ王の長口舌は作者による補足。おそらくこのような形でゲルマンないしザクセンでは外国からの使者拝謁がおこなわれたのであろう。

562) **ôstronea** : *adj.* ôstrôni 「東方の」の男性複数主格。541 行既出の ôstan は「東方から」、571 行に出る ôstar は「東方へ」。ôstrôni は方向を示すこの ôstar に更に -âni という語尾がついたもので、古英語、古ノルド語、古高独語、古ザクセン語のすべてに用いられた (英 eastern, western 等、現代ノルウェー語 austrøn 等)。しかし高地独語では早く消失し、östlich, westlich 等となっている。この -âni (古英語 -ne、古ノルド語 -øn) という語尾はラテン語の -âneus をなぞったものという説もある。

563) **uuordspâhe** : *adj.* word-spâh 「弁舌巧みな、雄弁な」の複数主格 125 行に wordun spâhi という表現が既出。

564) **ôdo** : *adv.* 「容易に」。 376行の *ôd-môdi* 「謙虚さ」の前半部に見られる *adj.* *ôdi* 「気楽な、容易な」の *adv.*。「運び去る、空虚にする」意の印欧祖語 **au-* (たとえばラテン語 *au-ferro*) にもとづき、「残りなく、きれいさっぱりと、腹蔵なく」が原義と思われる。現代独 *ôde* 「なにもない、荒涼とした」もこの系統。

566) **adaliés** : *stn.* *adali* 「高貴な種属」の単数属格。集合名詞として「貴族」の意にもなる。しかしこの箇所では、次行の *gôdsprakea gumon* からわかるように、出自よりは精神的の高貴さの意味が濃いようである。

567) **gôdsprâkea** : *adj.* *gôd-sprâki* 「良き言葉を語る、雄弁な」の複数主格。旧約の預言者のことであるが、雄弁であることは古ゲルマン人の間で美徳のひとつでもあった。武器を取っての一騎討ちも、多くはその前の多弁なる舌戦を前提とすることは【ヒルデブラントの歌】や【ニーヘルンゲンの歌】、また【エッタ】【サガ】が証明するところである。このゲルマン的美意識がこの箇所にも残存していると見てよいだろう。

568) **ghêtun** : *ghêtan* 「約束する」(独 *ver-heißen*) の過去 3 人称複数。

569) **uuârum uuordun** : 具格機能の与格 (頻出)。**giuittig** : *adj.* *gi-witig* 「賢い」。*witan* 「知っている」、*wis* 「賢い」、*gi-wit* 「賢明さ」などの関連語。現代独の対応語 *witzig* や *Witz* の「機知 (に富む)」という意味は、17世紀以降フランス語 *esprit* や英 *wit* の影響下に新たに生じたもので、以前はやはり「知恵、分別」を意味した。

★ 569行以下に語られるこの賢者とは、メソポタミア出身の異教徒預言者バラム (*Balaam*) のこと。モアブ王の命によってイスラエル人を呪わんとしたが、神の霊により逆に祝福した (民数記 22、23、24 章)。Hrabanus の注解書 (Lマタイ¹ 2,2) によって詩人は記述しているのである。

570) **filuuuîs** : *adj.* *filu-wîs* 「多識の」。**for**n : *adv.* 「以前、かつて」。217行既出の *adj.* *fern* 「この前の」の *adv.* (独 *Firn* 「万年雪」、*firn* 「(雪やワインが) 古い」なども同系)。

571) **aldirô** : *swm.* 「先祖、祖先」の単数主格。*ald* 「古い、老いた」(独 *alt*, 英 *old*) の比較級の名詞化で (したがって弱変化)、「古老、先人」が原義 (英 *elders*, ♀独 *Eltern* 「両親」)。**ôstar** : *adv.* 「東方へ向かって」。*-ar* 「…の方角へ」、*-an* 「…の方角から」等の語尾は頻出。*ôstar hinan* で「当地からすれば東方において」。

572) **sprâkono sô spâhi** : 「言辞・弁舌 (複数属格) に関してかくも賢い」。**rekkien** : *swv.* 「物語る、説く」の不定形。第3行に既出。原義は「まっすぐ延ばす」(独 *recken*) で、そこから「正しく説く、判断する、導く、支配する」等の意が生じた (ラテン語 *regere* 「支配する」)。ここでも単に話すのではなく、耳にしたことを「正しい表現によって話す」こと。**spel** : *stn.* 「言葉、話」の単数対格。519行に *wil-spel* 「喜ばしい知らせ」として既出。

573) **forliuuan** : *stv.* (I) *far-lihan* 「授ける、貸与する」(独 *ver-leihen*) の過去分詞。語根の印欧祖語 **leiku-* は「後に残す」意で、数詞「11」独 *e-lf*, 英 *e-leven* (<「10を越してひとつ

余ったもの」) や「12」の後半部も同系である。この *far-lihan* は次行の *that* 以下を受けて「…する力を授けていた」の意。

574) **up** : *adv.* 「上方へ」(独 *auf*, 英 *up*)。前の *fon* の意味を補充する機能を持つ。

575) **bithiu** : *adv.* 「それゆえに」。 *thiu* は *that* の具格。176 行の *bihuui* 「なにゆえに」の註を参照。

576) **githähhti** : 複数主格。

577) **afgeban** : *stv.* (Ⅴ) 「放棄する、立去る」(独 *aufgeben*, 英 *to give up*)。 **gardos** : *stm.* *gard* 「(単数で) 畑、敷地; (複数で) 家、住居、家族」の複数対格。51 行以下に登場する *middil-gard* 「現世、この世」の後半部にも見られるこの *gard* は、印欧祖語 **gher-* 「囲い込む、つかむ」に由来し、「柵で囲った住居と畑地」が原義だった。牧畜や畑作、狩猟を共同で行なったゲルマン人は、自分の家のまわりを柵で囲って自家用の畑作と家畜放牧に用いた。このことから *gard* には早くから「家、住居、家族」と「敷地、家屋敷; 庭園、庭」との意味分化が生じた。英 *yard*、独 *Garten* に残るが、ただし英 *garden* はフランク語から古仏語に採用されたものが(仏 *jardin*)、再び英語に再輸入された形である。『ヘーリアント』では「庭」には弱変化の *gardo* が用いられ、強変化の *gard* 「居住地、家屋敷、畑地」とははっきり区別されている。

gadulingo : *stm.* *gaduling* 「同族の者、近親」の複数属格。語源は 221 行註を参照。

gimang : *stn.* 「多勢、群れ」(独 *Menge*, *Ge-menge*; ♀ 英 *a-mong*) の単数対格。

578) **drôm** : *stm.* 「楽しい営み、にぎやかな喜び」の単数対格。316 行既出の「夢」の *drôm* とは別語と思われるが不詳。従来は「睡眠中の楽しい営み」が即ち「夢」であると解釈されてきた。 **lioh̄t ôdar** : 「別の(世の) 光」、即ち「あの世、彼岸」。

582) **giuuard** : < *gi-werðan* 「起きる、生じる」。この前の *quam* とともに直接法過去であることに注意。実現した事実として、『ヘーリアント』の作者が補足的に口添えている雰囲気である。 **uufiscuning** : *stm.* *wis-kuning* 「賢王、賢帝」。ゲルマン人が評価する「(世俗の意味で) 賢明な、才智に富んだ」に、キリスト教的・古典古代的な「(倫理的な) 英知をもった」が合流したものが *wis* である。 *wiskuning* という合成語はこの 1 例のみ。

584) **bezton** : = *beston*。

586) **êuandaga** : *stm.* *êwan-dag* 「永遠(の日)」の単数与格。常に *te* と共に用いられる。 *adj.* *êwan/êwin/êwig* (独 *ewig*) は同義だが、*êwan* は合成語を作るのが普通。印欧祖語 **aiu* 「一生、永遠」に由来し、ギリシャ語 *aiôn*, ラテン語 *aevum*, ゴート語 *aivs* 「時、永遠」などが同系語である。類出する *adv.* *eo, io, gio* 「常に、いつか、かつて」も同語源で、英 *ever*, 独 *je, immer* などに残る。*te êwandaga* という表現は、教会ラテン語の *per dies sempiternos* という慣用句をなぞったものと思われる (Ilkow)。

587) **the** : *dag* を受ける関係副詞 (独 *da*)。

588) **gidrôgi** : *stv.* (Ⅵ) *gi-dragan* 「運ぶ; 生む」(独 *tragen*) の接続法過去 3 人称単数。 *gi-*

beranと同じく、完了相化の接頭辞 *gi-* の機能が強く働いている。 *ên* : 「ただ…だけ」。次行の *himiltungal* につく強調的 *adv.* だが、M 写本にはない。

589) *skinan* : *stv.* (I) 「輝く」(独 *scheinen*, 英 *to shine*)。他の印欧語では「どんよりした輝き、影」をも意味したが(日本語の「かがやき」と「かげ」の関係をも想起させる)、ゲルマン語では常に太陽や星の明らかな輝きを表わした。

590) *himiltungal* : *stn.* 「天体、天の星」。 *tungal* はゴート語 *tuggl*, 古英語 *tungol*, 古ノルド語 *tungl* で、すべて「天体」を表わす。語源未詳だが、天体から発するチカチカした輝きを「舌状」と見て **tungla* (独 *Zunge*, 英 *tongue*, ♀ 独 *züngeln*, 英 *tongulet*) と表現したという説(J. Grimm, O. Schade) が興味深い。 *huít* : *adj.* *hwit* 「白い」(英 *white*, 独 *weiß*)。

habdin : 接続法過去 1 人称複数。ラテン語や現代独語なら接続法完了形になるはずのところ。

591) *undartuisc* : *präp.* (対格支配) *undar-twisk* 「…の間に」(独 *zwischen*, 英 *between*)。熟詞 *twêne* の派生語であることは明白。 *ôdar* : 「別のもの、第2のもの」。前行 *sulic so* …と結んで *habdin* の対格目的語：「私たちがこの地で未だかつて持ったことがない類の(白い星)、どこかしらでまた別のものも未だもったことがないような(白い星)」。意味の上からは「この地であれ、またどの地であれ」に近くなるだろう。 *ôdar* を一種の *adv.* と解せばよい。 *huerigin* : *adv.* = *hwargin* 「どこかしらに」(25行に既出)。

592) *ne sulic barn* … : 星と並べて *barn* を出すのはやや無理があるが、押韻のため。

★ 562行からここまでは *Tatian* や福音書にもとづかず、*Hrabanus* の「マタイ」註解をもとに『ヘーリアント』詩人が自由に補足した詩行。学問的、あるいは教会説教的解説と言っていだろう。

bedu : *stf.* *beda* 「拝礼、祈り；願い」(独 *Gebet*, *Bitte*) の単数与格。既にゴート語に *bida* が登場。おそらく印欧祖語 **bhedh-* 「曲げる」に由来する。祈るために膝や身を折りかがめるからだろう。672行 *knio-beda* 「膝まづいての拝礼」参照。英 *to bid* や *bead* 「ビーズ玉、数珠玉」(数珠で祈りの回数を数えたところから) も関連語である。 *fôrin* : *stv.* *faran* の接続法過去。

593) *thenkean* : *hêtan* と結ぶ不定詞。ここでは「考える」よりむしろ「思いをこらす、注意する」ほどの意。

594) *huan êr* : 「いつ (はじめて)」。 *êr* は元語。105行に既出。 *gisâuuin* : *gisehan* 「見つける、気づく」の接続法過去。 *sîdogean* : = *sîdon* 「行く」(425行既出)。この不定詞の主体は次行の *bôcan*。

595) *garuuuian* : *swv.* *garuwian* 「準備する」。 *adj.* *garu* 「準備のできた」の派生語。273行註を参照。

596) *uui* : = *wi*。593行の *threa man* が即ち自分たちであることをこの唐突な *wi* が物語る。いささかドラマ性を感じさせる語り口である。 *sô* : 従属接続詞 = 独 *wenn*, 英 *if*, *when*。 *furi* : *adv.* 「前方に、先立って」(独 *vor-aus*, 英 *be-fore*)。 *uurdi* : *werdan* の接続法過去。

furiと結んで「しるしが前方に生じる」即ち「前方に進む」の意。

597) **uuestar** : 前行のfuri uurdīにつき、進行する星の方向を示す。 **giuuārod** : 374行に既出（独be-wahrheiten）。 **cuman** : 過去分詞。

599) **bald** : *adj.* 「大胆な、勇気ある」（英bold）。古ゲルマンの英雄に好んで冠される常套的修飾語。原義はおそらくBall「ボール」などと同根で「強く膨れること」と思われる。古高独語、中高独語baltも「勇敢な」であったが、*adv.* baldoは「勇敢に」から「ためらわずに即刻、すぐさま」に転じ、現代独語のbald「まもなく」に至っている。これに対応するように「勇敢な」の*adj.* bald, baltはkühnやtapferに取って代われ、今は人名Bald-uinや名詞Witz-bold「おかしな奴」などに残るのみである。 **strang** : *adj.* 「強力な」（英strong, 𐌺独streng「厳格な」）。370行に既出。

600) **hêdro** : *adv.* 「明るく、元気よく」（独heiter）。80行のiugud-hêd, 507行のmagad-hêdに現われるhêd「（輝かしい）身分、状態」と同系で、語源についても507行註で略述した。すなわち印欧祖語*kāi「輝く」に由来し、ゲルマン語では「明るいもの、はっきりした状態」を出発点として「人、身分、名誉、家系、流儀」など多くの意味をもち、英-hood, 独-heitという接尾辞や、人名Adel-heitなどにも残る **fon** : 「…の中で、間で」の意。 **sô ic uuêt** : 「私が知っているように」。三博士の言はこれまですべてwiで語られてきたので、このicは唐突である。頭韻の必要性もなく、そもそもこの文は内容上も重要でない。ひょっとすると『ヘーリアント』詩人自身の意見（いわゆる「草子地」）か？ しかし文脈からは三博士の（ひとりの）言としか考えられず、いささか推蔽不足の観がある。

601) **marcoda** : 「定める、決める」。128行註を参照。 **morgno** : *stm.* morgan「朝」（独Morgen, 英morn, morning）の複数属格で次のgihuilikiesにかかる（gihuilikies自身は副詞的属格） **morgen**は全ゲルマン共通語で、印欧祖語*mer-「きらきら輝く」に由来する。

602) **blican** : *stv* (I) blikan「輝く、ぴかぴか光る」の不定形。独bleich「青白い」、Bleich「ブリキ」、Blei「鉛」、Blick「まなざし」、英to bleach「漂白する」、仏blanc「白い」などと同根。 **sterron** : *swm.* sterro「星」（独Stern, 英star）の単数対格。印欧語共通と言ってよいほどの広がりを持つ単語である。

603) **uuegas endi uualdas** : 「道をたどり森を越えて」。副詞的機能の対格。**uualdas**は*stm.* wald「森」（独Wald）の複数対格。語源未詳だが、樹木や草のほうぼうと繁るところから独Wolle「羊毛」との関連が指摘され、また英・独wildとの関係も推測される。古英語wealdは今もweald「荒れ野、森林地帯」として、forestやwoodとは趣の異った森林に用いられることから、Wolleやwildとの共通性は肯定できる。『ヘーリアント』の時代のwaldはおそらく原生林に近く通行困難だったろうから、このフレーズも「道なき道を踏み分けて」というニュアンスが濃い。 **huuilon** : 170行に既出の*stf.* hwi[a]（独Weile, 英while）の複数与格。副詞的に「その時その時に」→「その間ずっと」の意。 **That** : 次行の接続詞that以下を先取りする指示代名

詞 **uuâri** : *wesan* の接続法過去。 **uilleono** : *swm. willeo* 「喜び」の複数属格。次の *mêsta* にかかる。 **mêsta** : *adj. mikil* の最上級、*willeo* と結ぶので男性単数主格 (独 *meist*, 英 *most*)。

604) **môstin** : = 独 *könnten*。 **uuiassin** : *witan* の接続法過去、主語は *wi*。

605) **kêsurdôma** : *stm. kêsur-dôm* 「帝国」(独 *Kaisertum*) の単数与格。後半部 *-dôm* (独 *-tum*, 英 *-dom*) については490行註を参照。

★ **cuning an thesum kêsurdôma** という表現はまず何より頭韻の必要上作られたものであるが、**kuning** と **kêsur** の法制上の相違 (62行の註参照) はきちんと踏まえている。つまり **kuning** は天地双方の王たり得るが、**kêsur** は地上の一部分の支配者たるに過ぎないという相違である。

606) **Erodesa** : 与格。ここではアクセントは *ê*-にある。 **innan briostun** : *briost* が常に複数で用いられることについては174行註を参照。

607) **harm** : *stm/n.* 「苦悩」の単数主格。*adj.* ではない。 **uuid herta** : 対格支配の *wid* は「…のあたり、…の周辺」の意味を持つことがある。たとえば3688行ではC写本が *um is herte*, M写本が *wid is herte* となっている。 **uualan** : *stv.* (VII-1) 「波立つ、沸き立つ」(独 *wallen*, *Welle* 「波」) の不定形。ラテン語 *volvare* と同根で、「回転」するが原義。

608) **gihôrde seggean thô** : 「(博士たちがこう) 言うのを聞いた (のだから)」。

完了相表示の接頭辞 *gi-* の機能が多少残っているように感じられる **gihôrian** である。

609) **obarhôbdon** : *swm. obar-hôbd(i)o* 「首領、主君」(独 *Oberhaupt*) の単数対格。「頭部」を「首領」の意味に用いるのは、日本語、中国語はもとより、どの言語にも共通しているが (英 *head*, 仏 *tête*, 羅 *caput*)、*obar-hôbdio* という語形にはラテン語の *supremum caput* が影響している可能性が高い (Ilkow)。**scoldi** : 運命・宿命を表わす *skullan*。

610) **craftagoron** : *adj. kraftag* 「力強い、権勢ある」(独 *kräftig*) の比較級、男性単数対格。

611) **gisidea** : 185、344行に既出。本来は「仲間、従者、家族」などを意味するが、ここでは「自らの民」ほどの意。

612) **sô huuat sô** : 437行に既出。部分属格である *gôdaro manno* と結び「ありとあらゆる良き人々」の意。

★ この行の頭韻は *huuat—Hier—gô-* で、口蓋摩擦音という点が共通音韻と感じられているわけである (g-は軟口蓋音)。

613) **allaro spâhoston spracono** : 「言辞に関して最も賢明なる者たち」。文頭に関係代名詞 *the* や *sô* が略されていると考えてよい。**allaro** は前行の *gôdaro* と同格の部分属格とともとれるが、しかしここでは既に最上級を強める *adv.* (独 *aller-*) となっていると考えられる。したがって **spâhoston** は *adj. spâhi* の最上級、複数主格。**spracono** は「言辞、弁舌に関して」の意味の複数属格で、**spâhi** との結びつきは572行に初出。

614) **bôkcraftes** : *stf.* bôk-kraft 「書物による (書物に関する) 知識、学識」の単数属格で次の *mêst* (中性単数対格) と結ぶ。本来は肉体的な力を意味する *kraft* を、このような知的・精神的力に用いるのは古英語 *cræft* の特徴であり、ここにも英国布教団の言語が『ヘーリアント』に及ぼした影響を見ることができる。詩人は前行の「言辞に長じた者たち」をもって、「マタイ」(2,4) の「祭司長たち」を、この「書物の力を持つ者たち」によって「学者たち」を表わそうとしたようである。352行に *bôk-spâhi* 「文筆の技に長じた」があったが、これは読み書きに強い役人たちのことであった。

615) **fragn** : *stv.* (Ⅲ-2) *fregnan* 「尋ねる」の過去形。同義の *swv.* *frâgon/frâgoian* (独 *fragen*) は *fregnan* の過去形から新たに作られたもので『ヘーリアント』ではこの弱変化の新形の方がはるかに多く、古形の *fregnan* は3例のみ。

616) **nîdhugdig** : *adj.* *nîd-hugdig* 「敵意をいたいた」。 *nîd* (独 *Neid*) については28行註を参照。-*hugdig* は *hugi* 「思い」から。

618) **uueroldrikea** : *stn.* *werold-riki* 「世界 (帝国)」(独 *Weltreich*) の単数与格。教会ラテン語 *regnum mundi* の翻訳語と思われ、「人の世、現世、地上世界」の含意がある。

619) **frîdugumono** : *swm.* *frîd-u-gumo* 「平和の人」の複数属格で *bezt* と結ぶ。450行の *frîd-u-barn* 「平和をもたらし御子」(即ちキリスト) と同発想の語。ただし「ルカ」(2,14) のキリスト生誕の讃歌「いと高きところには栄光が神にあれ。地には平和が御心にかなう人にあれ」の後半部が意識されていたとすると、「御心にかなう人」*homines bonae voluntatis* ということになろう。しかし文脈からやはり「平和をもたらし人」の方が妥当と思われる。

621) **bôkun** : *bôk* の複数ほとんど常に (旧約) 聖書を表わす。

622) **giuuritan** : *stv.* (gi)-*writan* (英 *to write*) の過去分詞。外来語系の *skriban* (独 *schreiben*) と翻訳借用語である土着系の *writan* の頻度差などについては233行註に記したが、*giskriban* と *giwritan* が並記されているこの箇所を見れば、両者間にもはや意味の差がなくなっていることがわかる。 **uuârsagon** : *swm.* *wâr-sago* 「預言者；占い師」(独 *Wahrsager*) の複数主格。一応はギリシャ系ラテン語 *pro-pheta* の翻案借用語と見なされ得るが、しかし必ずしもキリスト教導入期の新造語と限定しなくともよく、異教時代の「占い師」を表わす古い用語と考えることも可能。1422行に登場する *fora-sago* の方がむしろ *pro-pheta* の直訳借用語なのではあるまいか？ もちろんこの *wârsagon* が「マタイ」(2,6) の出典 (ミカ書) に登場する旧約の預言者たちを指していることは言うまでもないことであるが。

623) **bi godes crafta** : 「神の力によって」。この意味の *bi* (英 *by*) については230行註を参照。

624) **furn** : *adv.* = *forn*. 570行参照。

625) **burgo hirdi** : 「町々の牧者、守り手」。

627) **râdagebo** : *swm.* *râd-gebo* 「助言者、庇護者；支配者」(独 *Ratgeber*)。元来はゲルマン古来の法律用語で「判定者、成し手」だったらしい。このあたり (Tatian 8,3、「マタイ」2,6)

はラテン原文でも *iudex, qui reget populum*…「民を治める支配者が」となっていて法律用語が多く、『ヘーリアント』詩人も多少はそれに影響されたものであろう。 **rihtien** : swv. 「まっすぐに立てる；正しく治める、支配する」。印欧祖語 **reǵ* 「まっすぐなこと」を根源とし、「正義、法律、支配権、右側」など多岐にわたる意味を持つ（独 *auf-richten*, *re-gieren*, *recht*, 英 *right* 等）。308行註を参照。

628) **gumskepi** : *stm.* *gum-skepi* 「人々、民」の単数対格。ほぼラテン語 *populus* の訳語と考えてよいだろう。 *gum-* の原形 *gumo* については73行註を参照。他の類例：*gum-kunni* 「(男系の) 高貴な家系」、*gum-kunst* 「男らしさ」など。 **endi is geba** : 前行の関係文の続き。主語は関係代名詞 *the* で定動詞は *scal* である。 *is geba* 「贈り物、恵み」は女性単数属格。次行の *adj. mildi* は人の与格 (*managun thiodun*) と物の属格とをともなって「ある人に対してある物に関して寛大である、気前がいい」の意であり、かつ常に人を主語とする。したがって628行の *wesan* は前行の *scal* に支配される不定形。一見そう思えるように *geba* が主語ではないことに注意。

★ 628行以下は詩人の自由な補足文である。世俗的な「気前の良さ」（とりわけ君主の臣下に対する）という意味をまだ多分に残す *mildi* を用いることによって、ゲルマン英雄譚のような聴衆の耳に快い言葉を歌章の最後に効果的に響かせようとしたのではあるまいか。

★★ この歌章は詩人による膨大な補足や敷衍が見られるのが特徴的である。主に *Hrabanus* の註釈にもとづく旧約学的補足は説教的目的のためであろう。また東方の三博士の語りは冗長で素朴、かつやや荒けずりで、口承歌謡の未完成段階を見る趣がある。

〈第8歌章 三博士の拝礼と帰国〉

すると私が聞いたところでは、 邪念をいだいた王はただちに 630
この預言者たちの言葉を 異国の勇士たちに伝えたそうである、
彼ら、遠い国の 身分良き武士にして、
はるばるやってきた彼らに。 それから王は尋ねた、
いつ彼らが東の国において はじめてかの王者の星の
天に現われるのを見たのか、 あのしるしが燦然と 635
空に光り輝くのを。 すると彼らはいささかも包みかくさず
誠実にすべてを彼に語った。 そこで王は彼らに行って
御子の到来についての 彼らの使命をすべて果たすように
命じた。 それから王はみずから

640

きわめて真剣な調子で、このユダヤ人の王は、
賢者たちに命じた、すなわち彼らが西の国から旅立つ前に
必ず自分に、いずこに行けばかの王者に会えるのかを
教えるようにと。彼はこうも言った、自分もそこに供を連れて
おもむき、拝礼をしたいのであると。 実のところは、剣の鋭い刃をもって
御子の殺害者たらんと欲したのであった。ところが万能の主なる神は
この事態をも考えておられぬはずがなかった： 彼はこの世の光にあって
はるかに多く成しとげることができたのだ。これは今後も末永く明々白々、
神のみわざのおさとしは。 さて再びあのしるしが動きはじめた、
雲の間を燦然と。すると賢者たちも

645

650

またすぐそれに従うのだった。 彼らの使命に忠実に
勇んでその場を立ち去った。 神の御子をみずから
探し求めようとしていたからである。 つき従う者もなく
3人だけではあったが、 そんな事については心得のある者たちだった、
ささげ物をたずさえたこの3人は、まことの賢者であったから。

655

賢明なる彼らの目は、雲のひろがる空の下へと、
あるいは雲の上なる高い天へと、 白く輝く星の動きを追っていた、
——それが神からのしるしであると彼らは知った——キリストのために
この世に作り出されたしるしであると。 この男たちは真心をこめて
星を追った。 ——そうさせる力をお持ちの方が彼らを前進させ——
ついに彼らは、 歩み疲れた男たちは、

660

輝く神のしるしが、キラキラと天に光を放ちつつ
静止したのを見たのだった。 その星は明るく、白く、
その家の上で輝いた。 そこには聖なる御子が
みずからの意志でとどまっており、あの女性、あの乙女が
心をこめて御子の世話をしていた。するとつわものたちの心は
喜びで明るくなった。このようなしるしによって、
今や自分たちが神の平和の御子を、聖なる天の王を見出したと
わかったからである。それで彼らは、

665

数々のささげものをもった 東方の男たち、旅に疲れた人々は
家の中に入った。するとたちまち彼らには支配するお方が、
キリストがわかったのだ。 異国の勇士たちは

670

御子の前にひざまづき、 王者に対する仕方で
 その良き人に拝礼をして、 それからささげものをささげた、
 黄金と乳香とを 神のしるしとして、
 またそれに没薬をそえて。 この男たちはそれを済ますと 675
 つつしみ深く彼らの主の前に立ち、 それからみずからの手で
 いくつしみつつ抱きあげた。 それからこの賢者たちは、
 もののふたちは宿へ、 長旅につかれた男たちは
 旅宿へとおもむいた。 すると神の天使が夜中に
 眠っている彼らに ひとつの夢を見せた、 680
 夢の中にあるまぼろしを。 それは主みずからが
 支配者である御方が望んだことであつた。 すなわちだれかが彼らに
 言葉をもつてはっきり命じたように思われたのだ： その勇士たちは
 別な道によって祖国に帰るべしと、 そしてあの邪惡な
 ヘロデのところに再び もどつてはならぬと、 685
 あの怒れる王のところには。 さて輝かしい朝が
 この世界を訪れて、 賢者たちはたがいにその夢について
 語り始めた。 そしてみずからそれが万能の御方の
 言葉であると悟つたのだ、 というのも、彼らの胸中の英知は
 たいそう大きなものだったから。 彼らは万物の支配者、 690
 崇高なる天の王に祈りをささげ、 今後も神の恩寵を、
 神の御意志を実現できるように願い、 また自分たちがすべての思いを、
 心のありたけを毎朝神にささげてきたと告げた。 その後彼ら、
 東方のものふたちは、 神の使いが言葉でもって教えたように、
 そこを立去つた： 別の道をとつて 695
 神の教えに従つたのである。 ユダヤ人の王には
 東方の使者たちは、 御子の生誕についてはなにひとつとして、
 長旅に疲れたこの男たちは、 語ろうとはしなかつた。
 彼らはみずからの決意のままに立ち去つた。

〔福音書その他との対応〕 630 - 644 行は「マタイ」2 章 7 節と 8 節、644 - 648 行は詩人の自由補足、648 - 665 行は同 9 節、665 - 668 行は同 10 節、668 - 675 行は同 11 節、675 - 679 行は自由補足、677 - 686 行は同 12 節にもとづく大巾な敷衍、686 - 693 行は自由補足。各所で Hrabanus 註解を利用している。

〔Tatian との対応〕 8 章 4 節から 8 節まで。

第 8 歌章 註解

630) **Thô gifragn ic** : 語り手 (作者) である詩人が直接顔を出している「われ聞きおよびけるは」形式。口承文芸の伝統的様式のひとつ。288 行に初出。 **slīdmōd** : *adj.* *slīd-mōd* 「邪念をいだく、立腹した」。549 行に *slīd-wurdi* 「邪悪な言辞の」が既出。

631) **thero uuārsagono** : ヘロテが召集した祭司長や律法学者たちを指す。uuord は複数対格。 **uurekkiun** : *swm.* *wrekkio* 「異国からの勇士」(独 *Recke*) の複数与格。東方の三博士のこと。554 行既出の *wrak-sīd* 「国外追放；異邦への旅」に含まれる *wrak* 「追放、迫害」を語根としており (♀ 独 *rächen*, 英 *to wreak*)、したがって「国外追放者；異邦旅行者」が原義。自国の法の庇護を受けぬ *wrekkio* は心身ともに強くあらねばならず、またその種の男たちの多くが異邦の君主に武勇で仕えたことから、「勇士」という意味が派生した (独 *Recke*)。同時に「まともでない者、無頼漢、みじめな者」(英 *wretch*) という意味にもなり得たことは、容易に理解できる。

632) **elilendi** : *stn.* *eli-lendi* 「異邦、外国」の単数対格。語源は 345 行註を参照。

633) **ferran** : 556 行註を参照。 **gifarana** : *faran* の過去分詞であるが、*adj.* 複数主格の語尾をとっている。 **after thiu** : 「それから、その後」(113 行参照)。

634) **ōstaruegun** : *stm.* *ōstar-weg* 「東方 (への道)」の複数与格。ōstar は「東方へ」が原義であるが (541、562 行註参照)、ここでは方角指示性は弱く、「東方で、東の土地で」ほどの意。 *sūdar-liudi* 「南方の人々」(3036 行) という類例もある。weg が複数なのは「あちこちの土地、町や村」という含みであろう。 **gisāhin** : (gi-)sehan の接続法過去 3 人称複数。現代語の接続法完了の機能をもつ。

635) **cuningsterron** : *swm.* *kuning-sterro* 「王者の星」の単数対格。「マタイ」2,2 の三博士の言葉 *Ubi est qui natus est rex Iudaeorum? Vidimus enim stellam eius in oriente...* 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは東のほうでその方の星を見たので…」の *stellam eius (= rex)* を翻訳したものと考えてよいだろう。 **cumbal** : = *kumbl*, *kumbal*, *stn.* 「しるし」の単数 (複数?) 対格。古英語、古ノルド語、古高独語にも存在するが、語源不詳。 **liuhtien** : = *liochtian*, *swv.* 「光る」(独 *leuchten*, 英 *to light(en)*) の不定形。

636) **hêdro** : 600 行に既出。 **is** : 人称代名詞中性単数属格。行末の *euouiht* (222 行註参照) と結んで「それについてなにひとつも」。 **helen** : = *helan*, *stv.* (IV) 「かくす」(独[ver]-*hehlen*) の不定形。「つつみかくす」という印欧祖語 **kel-* に由来し、ラテン語 *cella*, 独 *Halle*, *Hölle*, *Hülse* など同系。

638) **al** : *adv.* 「完全に」。 **undarfundin** : *stv.* (III-1) *undar-findan* 「究明する、見出す」の接続法過去 3 人称複数。

639) **umbi** : 「…に関して、をめぐって」。 **cumi** : 常に複数で現われ、しかも神とキリストの到来に関してしか用いられないことは 489 行註でふれた。

640) **hardlico** : = *hard-liko*, *adv.* 「きびしく」(独 *hart*, 英 *hard*)。

641) **fôrin** : *faran* の接続法過去。 **uuestan** : 「西から」。写本は M、C とも *uuestar* と誤記。

643) **seldon** : *stf.* *selida* 「家、住居」の複数与格。一戸に複数の住居空間があることを意識する故に常に複数形で用いられ、必然的に豪壮な邸宅という含意がある。ゴート語以来の古いゲルマン語。229 行 *win-seli*, 549 行の *seli* (独 *Saal*, 仏 *salon*) の註を参照。

644) **bedan** : (M 写本では *bedon*) *swv.* 「拝礼する、おがむ」(独 *beten*, 英 *to bid*) の不定形。*stv.* *biddian* 「乞い願う」(独 *bitten*) から作られた新造語。592 行に既出の名詞 *beda* が先に作られ、それから更に動詞ができたもの。*bedon* は *prâp. te* をともなって「ある人に対し拝礼をなす」と用いられることが多い。 **hogda** : *swv.* *huggian* 「考える」(< *hugi*) の過去 3 人称単数。同義の *gi-huggian* は 161 行に既出。ここでは不定詞 *werðan* と結んで「企てる、意図する」の意。 **im** : 幼児キリストを指す。 **banon** : *swm.* *bano* 「殺人者」の単数与格。 *im te banon werðan* で「彼 (= 幼児キリスト) の殺害者となる、彼を殺す」。「打ち殺す」意のゲルマン祖語 **ban-* に由来し、詩語として古英語、古ノルド語、古高独語でも頻用された。英 (詩) *bane* 「死、悲嘆」に残る。

645) **uuâpnes** : *stn.* *wâpan* 「武器、剣」(独 *Waffe*, 英 *weapon*) の単数属格。501 行に既出。 **eggiun** : *stf.* *eggia* 「刃」(英 *edge*) の複数与格 (= 具格機能)。印欧祖語 **ak-*, **ok-* 「鋭い」に由来し、ラテン語 *aciēs* 「刃、武力」、ギリシャ語 *akmê* 「頂天」、独 *Ecke* 「かど、すみ」などと同系。

646) **uuid them thinga** : 「この事態に対して」。 *wid* は「…を防ぐべく」、*thinga* は単数与格。 **athengean** : *swv.* *a-thengian/an-thengian* 「実行する、なしとげる」の不定形。253 行の *gi-thihan* 「成長する、栄える」(独 *ge-deihen*) と同根。「栄えるようにさせる」が原義。

647) **an thesum liehte** : = 「この世において」。 **skîn** : *adj.* (*wesan*, *werðan* とともに) 述語的にのみ用いられて「明白な」。589 行既出の *skinan* (独 *scheinen*, 英 *to shine*) の *adj.*

648) **gicûdid craft godes** : 「告知された神の力」。前行 *that* の説明。

★ 644 行後半から 648 行前半までは作者による補足。特に 647 行後半は現在形を用いて、

作者自身の説教のような趣がある。

650) **fûsa** : *adj.* fûs 「準備ができた」の複数主格。 *swv.* fûsian 「努める」の関連語で、 *stv.* findan と同根かと思われるが不詳。 **te faranne** : 動名詞の与格形。 **giuuitun** : 356 行註参照。

652) **gisîdeas** : mêt と結ぶ部分属格。

653) **uuissun** : < *stv.* witan。 **thingo** : 複数属格。 **giskêd** : *stn.* 「情報、消息」(独 Be-scheid) の単数対格。 独 Bescheid wissen と同様に動詞 witan ないし kunnan と結んで、また「…についての」を表わす属格 (thingo) と共に用いられる。動詞 skêdan 「分ける、分別する」(独 scheiden, ♀ 英 to shed) の派生語で「わけ知り、分別、弁別」が原義。

654) **im** : 与格の再帰代名詞 (関心の与格)。 **geba** : 複数対格。 **lêddun** : 554 行に既出の *swv.* lêdian の過去複数形。

655) **skion** : *stm.* skion 「雲；雲におおわれた空」(♀ 英 sky) の単数対格。印欧祖語 *(s)keu- 「おおう」に由来し、ラテン語 ob-scurus 「おおわれた→暗い」、古英語 scêo 「雲」、古ノルド語 ský 「雲」、英 shadow, 独 Schatten などと同系。(ちなみに英 sky は中英語期に北欧語からとり入れられ、しだいに意味拡大されたもの。) したがって wolknes skion は、4289 行の wolkanskion と共に一種の同義反復語である。次行の hôh himil は「雲のない高い天空」で、wolknes skion 「雲のかかった(低い)空」と区別されている。なお、undar thana wolknes skion, up te them hôhen himile で、動いて行く星の様子がよく活写されていると言てよい。

657) **that cumbal, thiu** … : 写本に混乱がある。thiu cumbal, thiu … であるべきところ。**thurh** : 「…のために思って」の意の *prâp.* (独 um … willen)。 **Krista** : 特殊な単数対格形。

658) **giuuarht** : < *gi-wirkian*。

659) **sie** : 複数対格。 **frumide** : 「支援した」 *frummian* の第 1 義は「前進させる」(4 行)。**the mahte** : 「それができるお方が」。**the** は指示代名詞男性単数主格であり、かつ関係代名詞の機能をも含む(独 derjenige, der)。**mahte** は助動詞 *mugan* の過去 3 人称単数。

660) **sîduuôrige** : *adj.* sîd-wôrig 「旅に疲れた」の複数主格。後半 wôrig は英 weary に残る。古英語 wôrian 「さまよう、ゆれ動く」と関連すると思われるが、それ以上は未詳。

661) **berht bôcan** : 単数対格。前行 *gisâhn* の目的語、内容上は次行 *gistan* dan の主語。**blêc** : *adj.* 「明るく輝く」の単数主格。602 行の *blikan* の項を参照。 独 bleich, Blech, Blei, 英 to bleach, 仏 blanc など同根。

662) **stillo** : *adv.* 「静かに、静止して」(英独 still)。**gistan** den : *stv.* 「立ちどまる」の不定形。*gi-* の完了相化機能が多少残存している。 **liohto** : *adv.* 「明るく」。 **skên** : < *stv.* skinan (589 行参照)。

664) **uonode** : *swv.* wonon, wunon 「とどまる、居住する」(独 wohnen) の過去 3 人称単数。**an uuilleon** : *swm.* willio の単数与格とも対格とも解せる：「みずからの意志のままに」。

665) **githiudo** : *adv.* 「それにふさわしく、手あつく」。ゴート語 *piup* 「善」と同系で、古ノルド語、古英語、古高独語などにも類語があるが、語源ははっきりしない。

666) **bôcna** : *bôkan* の単数与格。

668) **an** ~ **innan** : 103、114 行註参照。

671) **fellun** : *stv.* (Ⅶ-1) *fallan* 「落ちる、倒れる」(独 *fallen*, 英 *to fall*) の過去 3 人称複数。

672) **kneobeda** : *stf.* *knio-beda* 「ひざまづいての拝礼」の単数対格。「マタイ」(2,11) では *procidentes adoraverunt* 「ひれ伏して拝んだ」とある。異教時代のゲルマン人がひざまづいて祈る習慣をもっていたかどうか、定かではない。おそらくキリスト教改宗後とり入れられた方法であろう (Ilkow)。**an cuninguiſa** : 「王侯にふさわしいやりかたで」(551 行に既出)。

673) **gôdan** : 前行 *ina* の同格説明語、「彼を、その良きお方を」。**grôttun** : *swv.* *grôtian* 「呼びかける、あいさつする」(独 *grüßen*, 英 *to greet*) の過去 3 人称複数。**drôgun** : < *dragan*。

674) **gold** : *stn.* (独 *Gold*, 英 *gold*)。「輝く」意の印欧祖語 **ghel-* に由来する。黄金の名称は民族によって異なるので、多様な名称が存在しているところを見れば各地で採掘され尊重されたことがわかる。タキトゥスの『ゲルマニア』(5 章)によると、ゲルマン人は黄金をあまり尊重しないとある。当時の拝金主義ローマに批判的なタキトゥスが、ゲルマン社会を理想化して描いた点を考慮しても、当時のゲルマン人の(以前の青銅器時代や鉄器時代に比して)黄金軽視は事実だったようである。後にローマ文化の影響で彼らの間にも黄金崇拜の風潮が起り、ニーベルンゲン伝説に見られるような、民族移動期における極度の黄金尊重に至る。**uuihrôg** : *stm.* *wih-rôk*, *wî-rôk* 「香、乳香」(独 *Weih-rauch*)。106 行に既出。キリスト教とともに香を用いる習慣もゲルマン人に伝わったが、ゴート語、古英語、古高独語、それぞれ別な表現を用い、ドイツでは中・南部にまず定着した *wih-rouch/wih-rôk* が全国通用語となって、今日の *Weih-rauch* におよんでいる。**bi godes tēcnun** : 「神のしるしとして」。

675) **myrra** : *stf.* 「没薬、ミルラ」(独 *Myrrhe*, 英 *myrrh*)。ヘブライ・ギリシャ・ラテン語からの外来語。死体に油を注ぐ場合に用いる一種の防腐剤。「没薬」は *myrra* を中国で音訳したもの。蛇足ながら「木乃伊」という単語は元来、ミイラを意味する蘭語 *mumie* 又は仏語 *momie* (＜アラビア語 *mūmiya*) の漢音訳であったが、後にミイラ製造に必要な没薬ミルラと混同され、「ミイラ」と発音されるようになった。**garouua** : *adj.* *garu* の複数主格。

676) **it** : 中性単数対格、幼児キリストのこと。直前に *hērro* とあるので厳密には *in* とすべきところ。

677) **antfengun** : < *ant-fāhan*。

678) **seggi** : *stm.* *segg* 「男、戦士」の複数主格。古英語 *secg*, 古ノルド語 *seggr*。印欧祖語 **seku-* 「従う」を語根とし、羅 *sequor* や *socius* 「仲間」などと同族。**te seldon** : 「邸宅、立派な家」というニュアンスがあることは 643 行註でふれた。

679) **gastseli** : *stm.* *gast-seli* 「賓客室、客間；旅宿」の単数対格。229行註で述べたように、*seli* はどちらかというと領主などの館の宴会用広間（客人の宿泊室をも兼ねる）を表わした。だからこの箇所での *gastseli* を普通の旅人宿と見なすのは少々ためらわれる。専門的な旅宿がまだ存在しなかったと思われる古ザクセン社会の聴衆は、東方の三博士は幼児イエスの生まれた宮殿に賓客として泊まったか、あるいはその近くの富豪などに宿泊したと考えたのではなかろうか。

★ 東方の三博士が幼児キリストを腕に抱いたこと、その後旅宿におもむいたことは福音書や註解書にも出ていない。ひょっとすると『ヘーリアント』詩人はビザンツ・カロリング系の細密画写本に親しんでいて、その影響でこのシーンをリアルに描写したかったのかもしれない。

680) **slâpandiu** : *stv.* (VII-1) *slâpan* 「眠る」(独 *schlafen*, 英 *to sleep*) の現在分詞、複数対格。前行の *im* と同格で「眠っている彼らに」。**sueban** : *stm.* *sweban*, *swefn* 「眠り；夢」の単数対格。ラテン語 *somnus* 「眠り」、*somnium* 「夢」と同系の古語。英独等の西ゲルマン語では後に *slâp* 系統（原義は「ぐったりとすること」）が優勢となったが、北ゲルマン語では今日までこの系統が用いられている：アイスランド語 *svefn*, ノルウェー語 *svevn*, *svemn*、スウェーデン語 *sömn*、デンマーク語 *søvn*。

681) **gidrog** : *stn.* 「まぼろし」(♀独 *Trug* 「たぶらかし」) の単数対格。264行の *drugi-thing* 「ごまかし」の *drugi-* と近い関係にあり、古ノルド語 *draugr* 「幽霊」、316行既出の *dröm* 「夢」(英 *dream*, 独 *Traum*) とも同根。この *gidrog* は前行 *sweban* と同義の言い換え (Variation) ではあるが、しかし *sweban* では「眠り」と「夢」が未分化なのに比して、*gidrog* には「まぼろし」のニュアンスがずっと強い。

682) **thûhte** : < *swv.* *thunkian* (非人称動詞)。**man** : 「誰かが」。現代独の不定代名詞 *man* に近い用法。**gibudi** : *gibiodan* の接続法過去。

683) **im** : *faran* は与格再帰代名詞をとまうことが多い。**ôdran uueg** : 副詞的対格：「別の道を通して」。

684) **lidodin** : *swv.* *lidan* 「もっていく；(対格再帰代名詞とともに) 行く、おもむく」の接続法過去 3 人称複数。154行既出の *stv.* *lidan* 「行く」から作られた *swv.* **sie** : 再帰代名詞、3 人称複数対格。**lande** : この *land* は「自分の国、祖国」の意 (「マタイ」2,12 : *in regionem suam*) 。

690) **bârun** : *stv.* (IV) *beran* 「身につけて持つ、荷う」(英 *to bear*, ♀独 *ge-bären*) の過去 3 人称複数。**bâdun** : < *biddian*。

691) **hêron** : *adj.* 「気高い、崇高な」(独 *hehr*) の男性単数対格。元来「灰色の」を意味し、後に「白髪の、老成した」から「崇高な」に転じた。ラテン語 *senex* 「老いた」の比較級 *senior* が「老成した人；主君；神」としてこの頃用いられていたことと連動して、意味拡大が生じたと思われる。この *adj.* の比較級名詞化 *hêro* (独 *Herr*)、仏 *mon-sieur*、伊 *signior* などの関係については100行註を参照。**môstin** : = 独 *dürften*, *könnten*。次行 *giuuirkean* 「(努力して)

得る」にかかる。

692) **uulleon** : 「(神の) 愛顧」。

693) **morgan gihuuem** : 「毎朝」。男性単数与格（具格機能）。

695) **uurdun** : 具格機能の複数与格

696) **lêrun** : *lêra* の複数与格 *fulgengun* (<*fulgangan*>) の目的語。

698) **giouuiht** : C写本では *niouuiht*。

699) **uundun** : *swu.wendian* 「(1) まわす、転ずる。(2) (自動詞) 引き返す、立ち去る」(*duwenden*) の過去 3 人称複数。この例がそうであるように (2) の場合、与格の再帰代名詞をとるのが普通 (*im*)。元来 *stü. windan* の使役動詞だったことは 220 行註に言及。 **an iro uullion** : 664 行註を参照。

★ 686 行以下、「マタイ」(2,12) の簡潔な記述を補足説明する詩行が続く。特に 686 - 693 行は東方の三博士の言動をリアルに描いて独特である。そもそもこの第 8 歌章は他の歌章に比して詩人（作者）ののびやかな筆致がより目立つように感じられる。

〈第 9 歌章 嬰兒殺害とエジプト逃亡〉

するとその後、 支配者である神の 700
御使いがヨセフの夢に現われて、 その夜眠っている彼に
主の御使いが こう言ったのだ：神の御子を
邪まな思いをいだいた王が 探し出して
その命を奪おうと 計画していると。
「だからお前は 御子をエジプトの
地にお連れして その人々の間にとどまらねばならない。 705
神の御子と かの心正しき乙女とともに
かの国の民の中にとどまるのだ、 いつの日かお前の主の言葉が
お前の耳に届き、 ふたたびこの聖なる御子を、
お前の主であるこの御方を 連れもどってよいと
わかるまでは。」 旅の宿でこの夢を見たヨセフは 710
飛びおきて、 すぐさま神の命令を
悟ったのだ。 そこでこのつわものはあの乙女とともに
そこを発ち、 大きな山を越えて

異国へとおもむいた。 神の御子を
 敵から救おうとしたのである。 後になって 715
 自分の領国にいた ヘロデ王はこのことを聞き知った、
 あの賢者たちが この西国から東へと身を転じ
 彼らの故国へと 別の道によって帰ってしまったことを。
 王は悟った、賢者たちは 王の居所にもどって
 報告することを避けたのだと。 王の思いは悩みに満ち、 720
 心は嘆きに沈んだ。 彼は言った、あの者どもは自分を侮辱せんとして
 こうしたのだ、あの武士たちは、と。 こうして暗澹として座っていたが、
 遂に憤怒で胸がいっぱいになって、 自分にはもっと良い
 別の思案がわいたと告げた： 「かの者の年令を知っておるのだ、
 年の数がわかっておるのだ。 わしはその子がこの地上では、 725
 この民の間では 決して成長することはないように
 してやることができるのだ。」 そしてこの国の支配者ヘロデ、
 この地の民の王は 若武者たちに出動の厳命を発し、
 多くの子供の 首を彼らの腕で打ち落とせと
 命じたのであった。 ベツレヘムの周辺で 730
 生まれ、 2歳以下である子は
 ひとりももらさず。 すると凶暴なる行いをなしたのである、
 王の家来たちは。 数多くの幼い男の子が
 罪なくして死ぬことになった。 これ以前もこれ以降も
 幼い男の子たちが これより悲惨な破滅を、 735
 これより哀れな死を遂げたことはなかった。 女たちは泣き叫んだ、
 多くの母親が 息子の殺されるのを見なければならなかった。
 自分のもろ手で もろ腕で母は我子を、
 愛する小さい子を 抱きしめたのだが、
 助けることはできなかった。 子供は母親の目の前で 740
 命を捨てなければならなかった。 悪人どもは一向に気にせず
 残忍と悪虐のかぎりをつくした。 剣の刃をもって
 大きな悪事をなしたのである。 幼い男の子が
 数多く死し、 母親たちは幼な子の死を
 嘆き悲んだ。 ベツレヘムは嘆きに満ち、 745

悲しみの声は限りなく大きかった。 たえ母親たちの心臓を
 剣でまっぶたつに切ったとしても、 彼女らにとってこれ以上の苦しみは
 この世に起こり得なかった。 ベツレヘムのこの多くの女たち、
 妻である者たちにとっては。 彼女たちの目の前で我子が、 750
 幼い男の子が 無残な死をとげるのを見なければならなかった、
 血まみれで母親の腕の中で。 殺人鬼たちは殺しまくった、
 罪のない多勢の子を。 この男たちはこんな悪行について
 いささかのためらいも見せなかった。 彼らはひたすらあの権勢高き
 キリストご自身を殺そうとしたのである。 だが力ある神は
 彼らの敵意から御子を救われた。 すなわち夜の間にそこから 755
 エジプト人への国へと 勇士たちが彼を連れ出したのだ、
 男たちがヨセフとともに、 かの緑なす沃野へ、
 この地上の最善の地へと。 そこは一本の大河が、
 大いなるナイル川が 北の海へと流れている地である、
 川の中で最も美しきものが。 その地に神の平和の御子は 760
 心のままに住んだのだった、 遂に宿命が
 ヘロデ王をつかみ取り、 彼が人の子たちのもとを去らねばなくなる時まで、
 かのただけしき男が人の営みのもとを。 そしてこの領国の支配権を
 にぎったのはヘロデの後継者。 その名をアルケラーウス
 と言い、兜をいだく者たちの 統率者として 765
 この男がイエルサレムの一帯の ユダヤの民を、人々を
 治めることとなった。 すると御言葉がエジプトにいた
 あの高貴な男のもとに達した。 ヨセフに向かって
 その神の天使、 主なる御方の使いはこう語って
 命じたのだ、 再び御子をそこから 770
 故地にお連れせよ。 「ヘロデ王は今や」と彼は言った、
 「この現世の光から離れた。 かつて御子に害意をいただき、
 お命をねらったあの王は。 だから何の気づかいもなく
 御子を汝らの一族のもとにお連れせよ、 王は、あの不遜なる武士は
 もう生きていないのだから。」 ヨセフは即座に神の 775
 みしるしを悟り、 いとまを置かず旅の準備を整えた、
 あ乙女とともにこの勇士は。 ふたりが御子とともに

この地を去ろうと望んだその時すぐに。 彼らははえある天の定めを
支配者たる御方の意志を、 命じられた言葉のままに成し遂げたのだった。

〔福音書その他との対応〕 700 - 710行は「マタイ」2章13節、710 - 714行は同14節、715 - 732行は同16節、732 - 744行までは作者詩人による自由拡大文、744 - 754行までは同18節にもとづくが、大部分は自由補足文、754 - 763行はほぼ同14節にもとづくが、エジプトについての自由補足が多い。763 - 770行は同19節、770 - 775行は同20節、775 - 779行は同21節。

〔Tatianとの対応〕 9章1節 - 3節、10章1節、3節、11章1節と2節。

第9歌章 註解

700) **Iosepe** : Iosephの与格。

701) **suuefne** : < swefn = sweban.

704) **āhtean** : *swv.* āhtian「追う、つけ狙う」の不定形。現代独Acht「(法の庇護外への) 追放」、ächten「追放刑に処する」の関連語。ケルト語とケルマン語に共通するこの法律用語の語源は未詳。この刑に処せられると一切の法の庇護を失うことになり、したがって誰に殺害されてもよいわけであった。この箇所でも意味の比重は「命をつけ狙う、復讐として殺害する」にある。なおāhtianは目的語として物の属格をとる (is aldres)。 **aldres** : *stn.* aldar「生命；人生、老年」(独Alter)の単数属格(45、142行に既出)。 **Aegypteo** : 複数属格。landと結んで国名を作る。

705) **antlēdean** : *swv.* ant-lēdian「運ぶ、移す」。lēdianは554行に既出。

707) **uunon** : wonon, wunon. **untthat** : = ant-that (336行他に既出)。 **thi** : 与格。
cume : kumanの接続法現在3人称単数

708) **hërron** : 単数属格。

709) **môtis** : môtanの接続法現在2人称単数。

710) **ansprang** : = ant-sprang.

714) **berg** : *stm.* 「山」(独Berg、 $\mathfrak{F}$ 英barrow)の単数対格。なおbrëdan bergは「巾広い山」というより「巨大な山」ほどの意味であろう。『ヘーリアント』にはhōhas bergôsが2例見られる(5528、5663行)ほかに、berg...brêd endi hô(4225行)という例もある。もちろん頭韻の束縛がこの表現の最大の理由ではあろうが、まったく不自然な表現ではなかったにちがいない。

715) **fīundun** : 複数与格。 **antfōrian** : *swv.* 「...から(人の与格)逃がれさせる、遠ざける」($\mathfrak{F}$ 独ent-führen)。 *swv.* fōrianは *stv.* faranから新たに作られた他動詞(独führen - fahren)。

717) **gihuorban** : *stv.* (gi)hwerbanの過去分詞。語源等は282行註を参照。但しここでは自

動詞。

718) **ôdran uueg** : 683 行註参照。

719) **uuisse** : < witan.

720) **thes** : 「そのことについて→それゆえに」。

721) **mornondi** : *swv.* mornian, mornon 「つらく思う、嘆き悲しむ」（英 to mourn）の現在分詞。印欧祖語 *mer- 「思わづらう」に由来し、ラテン語 memor 「…を忘れない」と同系。

dedin : 不規則動詞 dôn の接続法過去 3 人称複数。

722) **hōndun** : *stf.* hōnda 「侮辱、嘲笑」（独 Hohn）の複数与格。te hōndun dôn で「侮辱する、物笑いの種にする」。ゴート語 haunjan 「おとしめる」を最古例とする動詞（古英語 hienan, 古低独語 gi-hōnian, 古高独語 hōnen, 現代独 ver-hönnen）から作られた抽象名詞。原義はゴート語 hauns に見られるように「低い」。**thô** : 従属接続詞。**hriuuig** : *adj.* hriwig, hriwi 「悄然とした、悲しんだ」。hriwon 「悲しむ」の *adj.*。現代英・独語では「後悔」に意味が限定されて独 Reue 「後悔」、reuen 「後悔する」、英 to rue 「後悔する」等に残るが、オランダ語 rouwen は今も「嘆く」を表わす。

723) **balg** : *stf.* (III-2) belgan 「（対格再帰代名詞とともに）怒る、憤激する」の過去 3 人称単数。原義は「怒りで身体がふくれあがる」ことらしく、そうだとすると独 Balg 「ふいご」、英 belly 「腹」、bellow 「ふいご」などと同系ということになる。独 böse 「立腹した、邪悪な」も「怒りで身体がふくれる」が原義で、Busen 「乳房」、英 bosom と近い関係にある。**ina** : 再帰代名詞対格。**is** : 「このことについて」。

724) **githenkien** : *swv.* 「思いつく」（独 er-denken）。他動詞である点が thenkian と異なる。**nu** : 次行の nu と結んで「今や…なので」の意の接続詞（英 now that）とも、また単なる副詞とも解釈できる。**can** : この時代 kunnan の本動詞的機能と助動詞のそれが未分化であったことは 208 行註でふれた。

725) **uuintargitalu** : *stn.* wintar-gital 「冬の汝、年数、年令」の複数対格。C 写本では wintrogital。冬を「年」の意味で用いることについては 145 行註を参照。**giuuinan** : that 以下のことを「やりとげる、成就する」ほどの意で、143 行に先行例がある。

728) **rinkos** : *stm.* rink 「（若い）戦士、男」の複数対格。古いゲルマン語で、古英語英雄詩「ベオウルフ」など主として詩に用いられる（226 行既出）。

729) **kinda** : 複数属格。次の filo 「多数」という中性単数対格代名詞と結ぶ。

730) **handmagen** : *stn.* hand-magan, -megin 「手の力、腕力、暴力」の単数対格。hand-kraft の同義語。-magan, -megin は動詞 mugan （独 mögen, 英 may）、名詞 maht （独 Macht, 英 might）と同根で、「力、能力」の意。**hōddu** : *stm* hōbid 「頭、首」（独 Haupt, 英 head）の単数具格。奪格の機能を持ち、次の bi-niman および前行の kinda filo と結んで「子供の多くをその頭から奪い去る」が直訳。306 行に先行例。**binâmin** : bi-niman の接続法過去 3 人称複数。

731) **sô filo sô** : 「…である限りすべて」。**wurdi** : 接続法過去 3 人称単数。

732) **an tuēm gērun** : 「2 歳以下の」。「マタイ」(2,16) によれば「その年令は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである」。ヘロデは「一歳以下にては満足せず二歳以下の嬰兒に及び、ベツレヘムのみにては不安であつてその近辺にまで及ぼした」(黒崎幸吉『註解新約聖書 マタイ伝』)。**atogan** : *stv.* (II) a-tiohan 「育てあげる、養育する」(独 *auf-ziehen*, *er-ziehen*, 英 *to e-ducate*) の過去分詞。前行末の *uurdi* と結ぶ。**tionon** : *swm.* *tiono* 「悪事、罪惡」の複数(単数?) 対格。古英語 *tēona*, 古ノルド語 *tjón*。現代英語(詩語)にも *teen* 「悲哀、不幸」として残る。『ヘーリアント』には *swv.* *gi-tiunian* 「危害を加える」(1819 行)も見られるが、語源ははっきりしない。

733) **kindisk** : *adj.* 「幼い、若い」(独 *kindisch*, *kindlich*)。 **kindisk man** 「幼い男の子」ではじめて、ヘロデが殺したのは男児だけだったことがわかる(「マタイ」2-16、には *pueros* 「男の子」とある)。

734) **sueltan** : *stv.* (III-2) *sweltan* 「死ぬ」の不定形。すでにゴート語に *swiltan* があり、古英語、古ノルド語等にも類語があるが、語源未詳。独 *schwül* 「むし暑い」、英 *to swelter* 「暑さにうたる」と関連づける説もある。**sundiono** : *stf.* *sundia* 「罪」(独 *Sünde*, 英 *sin*) の複数属格(86 行に既出)。**lôs** : 属格支配の *adj.*、詳しくは 87 行註を参照。**sid** : *adv.* *sid* 「それ以降」(♀ 独 *seit-dem*, 英 *since* [*< sithens < sid ðan*])。類出する同義の *sidor* は実はこの *sid* の比較級である(独 *später*, 英 *later* 等も同様に比較級)。**nog** : *adv.* *noh* 「また…も…ない」(独 *noch*, 英 *nor*)。同構造のラテン語 *ne-que* からもわかるように印欧祖語 **ne-kue* に由来し、ゴート語 *nih* をはじめとしてすべてのゲルマン語に見られる *adv.* 「今なお、まだ」の *noch* とは語源が異なる(46 行註参照)。低地ドイツ語では *nek* という語形の方が正統であり、事実『ヘーリアント』では *nek* 8 例に対し、*noh* は 2 例に過ぎない。*noh* という形は「今なお」の *noh* との混同によって生じたのだろう。

735) **giāmarlicara** : *adj.* *jāmar-lik* 「悲惨な」(独 *jämmer-lich*) の比較級、単数主格。西ゲルマン語のみに見られる単語で、語源不詳。**forhang** : *stm.* *for-* (= *far-*) *gang* 「没落、死去」の単数主格(♀ 独 *ver-gehen* 「過ぎ去る、死去する」)。**iungaro** : *adj.* *jung* 「若い」(独 *jung*, 英 *young*) の複数属格。

736) **armlicara** : *adj.* *arm-lik* 「哀れな」(♀ 独 *ärm-lich*) の比較級、単数主格。79 行 *erbi-* (独 *Erbe*) の註で説いたように、語源は「孤児のように哀れな、貧乏な」であった。**dôd** : *stm.* 「死」(独 *Tod*, 英 *death*)。 *swv.* *dôian* 「死ぬ」(英 *to die*) とともに、原義は「意識・感覚のなくなること」で、独 *taub*, *Dunst*, *dumm*, *tall* などと同根であるらしい。ドイツ語圏ではこの動詞は中世末まで用いられたが、後に *sterben* 系統に取って代わられた。英 *to die* は北歐語系である。**uuiopoun** : *stv.* (VII-2) *wôpian* 「嘆き悲しむ」(英 *to weep*) の過去 3 人称複数。ゴート語 *wôpian* 「大声で叫ぶ」の用例から見て、おそらく擬音語であろう。

737) **môdar** : 複数主格。 **megi**: magu の複数対格 (165 行註参照)。 **spildian** : *swv.* 「打ち殺す、殺害する」の不定形。古ノルド語、古英語、古高独語にも類語があり、語源はおそらく「打ち割る、裂く」で、独 *spleißen*, *Splitter*, 英 *to split* などと同根。この文は、*môdar*… *gisâhunl*… *gisidos iro megi spildian* 「母親たちは家来たちが我が子を殺すのを目にした」の意で、*gisidos* が略されていると考える。

738) **siu** : 女性単数主格。多くの母親の行為を単数形で代表させている (*singularis pro tanto*)。 **im** : 単数 (?) と格。次行の *barn* とも前行の *megi* ともとれる。 **giformon** : *swv.* (与格とともに)「…を助ける」の不定形。語源未詳 古英語の *feorm* 「栄養、食事、利点」、*feormian* 「養う、支持する」と関連するか? **thoh** : 従属接続詞。740 行の *thoh* は副詞。 **fadmon** : *stm.* (複数) *fadmos* 「(のぼした) 両手 (両腕)」の与格。「手をのぼす」意の印欧祖語 **pet-* に由来し、現代英語 *fathom* 「尋 [ひろ]」(水深単位、両手をひろげた長さ)、独 *Faden* 「(1) 尋、(2) 糸 (元来は一尋の長さの糸)」に残る。したがって本来は「のぼした腕」を意味したと思われるが、「ヘーリアント」では既に単なる「両手、両腕」となっている。

739) **armun** : 前行の *fadmon* とともに *mid* に支配され、複数与格。 *fadmos* の言い換え。 **bifengi** : *bi-fâhan* の接続法過去。

740) **simbla** : *adv.* 「常に、いつも」が原義だが (77 行註参照)、「いつにせよ→いづれにせよ」を経て「しかしながら」という逆説の意をも帯びるようになった (独 *immer* → *immerhin* を想起させる)。

741) **mênes** : 84 行註参照。次の *sehan* との関係で属格になっている。 **sâhun** : *sehan* は属格の目的語をとって「考慮する」。

742) **uuities** : 164 行註を参照。 **uuamscadon** : *swm.* *wam-skado* 「悪人、無法者」の複数主格。 *stm.* *wam* 「悪事、犯罪」と *swm.* *skado* 「悪人」とから成る。前半部の、ゴート語 *wamm* 「欠点、汚点」をはじめとしてすべてのゲルマン語に見られる *wam* の語源ははっきりしないが、「汚物、傷」(たとえばラテン語 *vomo* 「へとを吐く」) が原義とする説が魅力的である。後半の *skado* は、ゲルマン祖語 **skap(j)an* 「危害を加える」から作られた行為者名詞。独 *Schade(n)* 「損害」、英 (古) *scathe* 「損害」などに残る。 *wam-skado* という類語反復の表現は「悪人」の他に「悪魔」や「悪霊」の意にもしばしば用いられている (1050、2993 行など)。 **uuâpnes aggiun** : 645 行に既出。

743) **firinuerc** : *stm.* *firin-werk* の語源は 28 行註を参照。

744) **maguiunge** : *adj.* *magu-jung* 「幼い男子の、幼童の」の複数主格。

745) **kindiunagaro** : 167 行の例と同じく、名詞化形容詞、複数属格。 **qualm**. *stm.* 「死、殺害」の単数対格。「刺す; 刺すような痛み」を原義とし、独 *Qual* 「苦痛」、*quâlen* 「責めさいなむ」、英 *qualm* 「めまい、吐き気、良心の痛み」などに残る。 **cara** : 499 行に既出 (英 *care*)。

746) **hofno** : *stf.* hofna 「嘆きの声」の複数属格。 *stv.* (II) hioban 「嘆き叫ぶ」から作られた名詞。既にゴート語 hiufan に見られるこの語は、kara と同じく擬音だったと思われる。
hlūdost : *adj.* hlūd 「声高の」(独 laut, 英 loud) の最上級、単数主格。 **man** : 不定代名詞。
im : 複数与格、いわゆる「所有の与格」で、母親たちを指す。ただし C 写本にはない。 **iro herton** : 「彼女たちの心臓を」。 **an tuê** : 390 行註参照。

747) **snidi** : *stv.* (I) 「切る」(独 schneiden) の接続法過去 3 人称単数。語源不詳。
suerdu : *stn.* swerd 「剣」(独 Schwert, 英 sword) の単数具格。語源不詳。 **sêrara** : *adj.* sêr 「痛い、つらい」(英 sore) の比較級、単数主格。ゴート語 sair 「痛苦」以来この系統の語は全てのゲルマン語に共通に存在する。ドイツ語では *adv.* sehr 「痛く→ひどく→非常に」、ver-schren 「傷つける」に、また英 sorry 「心が痛い、遺憾な」に残る。

748) **uuibun** : 次行の brūdiun 「妻」とともに複数与格。前行の im の具体的説明語。

749) **biforan** : 「わが目の前で」。

750) **qualmu** : 具格。

751) **blōdag** : *adj.* 「血まみれの」(独 blutig, 英 bloody) の中性複数対格で、749 行の barn に対する補語となる。C 写本では blodaga で、男性複数対格形、したがって 750 行の man の補語ということになる。 **barmun** : 216 行に既出。 **banon** : 644 行に既出。 **uuitnodun** : 501 行に既出。

752) **unsculdig** : *adj.* un-skuldig 「罪のない」(独 unschuldig) の単数対格。skuldig は名詞 skuld 「負債；罪」の派生語であるが、更に skuldig, skuld の双方ともに動詞 skulan (英 shall, 独 sollen) に由来する。ちなみに独 sollen は skulan, scolan 等の縮約された新形である。この語は元来、主に金銭(や行為)についての債務を表わしたが、後にキリスト教の普及によって精神的・宗教的な義務、債務、また過失、罪、をも表わすようになった。犯した罪に罰金を払うという教会の慣習は従来のゲルマン人の法慣行にも合致したから、いっそう容易にこの意味拡大はおこなわれた。 **scole** : *stf.* skola 「多勢」の単数対格(C 写本は scola)。現代英語 shoal, school 「(魚の) 群れ；群衆」に残るこの語の由来を Kluge は、後期ラテン語の schola 「学校→教師や生徒の集団→一族郎党、軍勢」から説明している(Wb. "Schule")。 **biscribun** : *stv.* (I) bi-skriban 「考慮する、自制する、控え目にする」の過去 3 人称複数。「書く」skriban との関係はわかりづらいが、古英語 scrifan にも全く同様に「考慮する、気づかう」の意味があり、『ヘーリアント』のこの箇所への影響が想像される。「司祭が規則を書いて示す→(書式によって) 償いの苦行を課す→告解を課す→告解に行く、罪を悔いる→気づかう」というような経過をたどったのではなからうか。この意味の古英語 scrifan は現在 to shrive 「罪を告解する」として残っている。英 pre-scribe, 独 vor-schreiben なども参考になろう。

753) **umbi** : biskriban と結んで「…に関して」。 **mênuerk** : *stn.* mên-werk 「悪事」の単(複?) 数対格。mên (英 mean, 独 Mein-eid などが関連語) については 84 行註を参照。

754) **aquellian** : *swv.* 「殺害する」。745行の **qualm** 「死、殺害」の関連語で独 **quälen** にも近い。

★ 733 - 754行まで20行余の生々しい嬰兒殺害の描写は、福音書や註解、また Tatian にももとづいておらず、作者の独創性がよく出ている箇所である。(後の Otfrid も大巾に内容をふくませ、とりわけ母親の悲しいあらがいを活写した36行におよぶ詩節を作っている。) 詩人の筆は冴え、多くのゲルマン系頭韻語を楽々と駆使してリズムカルであり、戦闘描写に長じたゲルマン古詩の一部を聞く思いすらする。同じことは第58歌章でベトロが大祭司の下男の手を切り落す(4871行以下; 「ヨハネ」18,10) 場面にも当てはまる。極めて簡潔な福音書本文以外の資料、たとえば造形芸術からの影響が強いと思われる。もっとも嬰兒殺しのモチーフは、初期中世においてはローマのサン・マジョーレ教会のモザイク画、ビザンツの象牙細工などに見られるが、まだ数は少い。このテーマが盛んになるのは盛期中世以降である。少々深読みをすれば、残酷なサクセン戦役の記憶がまだ生々しい聴衆を意識した詩人が、いっそうの効果をねらってこのように作詩したとも考えられよう。あるいは、新約聖書では極めて稀な闘争場面に当って、ゲルマン詩人として筆の走りを押さえることができなかったのかもしれない。

754) **gineridan** : *swv.* (gi)nerian 「救う」の過去分詞、男性単数対格形。直訳は「神が彼を救われた者として持った」。完全な過去完了時制にはまだ至っていない構文である(ただしC写本は **ginerid** となっている)。nerian の語源等は520行の **neriandas**, **ginist** についての註を参照。
uuid iro nide : 「彼らの敵意にさからって、防いで」。**nid** (独 **Neid**) の語源等は28行註を参照。
inan : *in.* 高地ドイツ語形で、M写本にこの1例のみ見られる。
nahtes : 425行に既出。

756) **erlos** … **gumon** : あたかもヨセフたちに多くの従者がいたかのようなのである。頭韻の必要からとも考えられる。
antlêddun : < *swv.* **ant-lêdian** :

757) **grôneon** : *adj.* **grôni** 「緑の」(独 **grün**, 英 **green**) の男性単数対格。おそらく英 to **grow** (古高独 **gruoen**, 中高独 **grüejēn**) の関連語で、原義は「成長する草の(ような)」であったろう。ここから「緑の」となり、またそれは春の色であることから「希望の、喜びの」という意味をもった。この箇所もそのようなニュアンスを帯びている。
uang : *stm.* **wang** 「野、草地、平野」。語源等については275行 **heban-wang** 「天国」の註参照。すでにゴート語において **waggis** は「天国」を意味しており、この箇所においても「天国に類する緑したたる沃野」というニュアンスがある。

758) **aha** : *stf.* 「水、流れ、川、湖水」。印欧祖語 ***aqua-** 「水」に由来し(ラテン語 **aqua**)、ゴート語 **ahwa** 以降すべてのゲルマン語に登場する。ドイツ語では河川名: **Ach**, **Aach**, **Salzach**, **Fuld-a** などに残る。また関連語として **Au** や **Aue** 「水辺の地、草地、半島、島」、**Gau** (< **Ge-au**) 「沃野地帯→地方、州、ガウ」がある。サンスクリット語から日本語にも仏教用語として「閼伽」が入っているのは周知の通り。
fliutid : *stv.* (II) **fliotan** 「流れる」(独 **fließen**, 英 to

fleet) の現在 3 人称単数。

759) **Nîlstrôm** : *stm.* Nîl-strôm 「ナイル川」。strôm = 独 Strom、英 stream。 **nord** : *adv.* 「北方へ」。方向指示の接尾辞 -od、-rod は既に頻出 (her-od, thar-od 等、62 行註)。
sêuua : *stm.* sêo, sêu 「海、湖」(独 See, 英 sea) の単数与格。語源のはっきりしないこの語はすべてのゲルマン語において男性名詞だったが、古英語、中低独語では女性となることも稀ではなかった。ゴート語 *saiws* は「湖」で、*mareis* 「海」とは区別されていたが、他のすべてのゲルマン語では (ちょうど日本語の「うみ」「みずうみ」のように) 「海」「湖」の双方を表わしていた。現代独の *die See* 「海」、*der See* 「湖」という区別は 16 世紀以降で、この時代に南北の交流がおこり、それまで「湖」しか知らなかった高地独語が「海」を指す新語として低独語の *die See* を取り入れてからである。

760) **flôdo** : *stf/m.* 「(大量の水の強い) 流れ、河川；洪水」(独 Flut, 英 flood) の複数属格。758 行の *fliotan* と同源 (*pleu- 「流れる」)。「強い水流」が原義であることは、今日でも *Fluten des Rheins* 「ライン川の滔々たる流れ」などの表現にうかがわれる。

★ 756、7 行ではヨセフを助ける仲間の武者たち、あるいは従者たちがいたかのような筆致になっている。ザクセン貴族を主体とする聴衆の耳に快いような堂々とした「撤退」に模様変えしただ方がよいと、詩人は判断したのでろう。757 行から 760 行までの、エジプトをまるで地上の楽土 (ゲルマン人にとっては「緑の沃野」*grôni wang*) であるかのごとく描く数行も、「マタイ」等には見あたらない。『ヘーリアント』作者はこの肥沃なナイル平野について、相当の知識と好感をもっていたようである。ひょっとすると彼の身近に、エジプトを実際に訪れたことのあるアングロ・サクソンかフランク族の修道士仲間でもいたのかもしれない。

761) **an uuilleon** : 664 行註参照。 **uurd** : *stf.* wurd 「宿命、運命」(英 weird)。127 行、197 行に *wurdi-giscapu* として既出。印欧祖語 *uert- 「転ずる」に由来し、(*werdan* と同根)、「有為転変」から「宿命、運命」になったと思われる。古ノルド語には運命の女神 *Urdr* が登場し、ローマ神話の *fata* のごとく、固有名詞とも普通名詞ともつかぬ働きをする。あるいは『ヘーリアント』においても、*wurd* にはそのようなニュアンスが含まれていたのかもしれない。
fornam : *stf.* (IV) *far-niman* 「取り去る、奪い取る」の過去 3 人称単数。

762) **eldeo barn** : 408 行に既出。

763) **môdag** : *adj.* 男性単数主格。前行 *he* の説明語。 **drôm** : 単数対格：「人の営み、人生」。578 行既出。 **marca** : *stf.* *marka* 「国境、辺境、領土」(独 Mark, 英 mark) の単数属格。「国境のしるし」が原義で、ラテン語 *margo* 「境界、へり」と同系。*Den-mark* や *Mark Brandenburg* などの国名や地名に残るが、ドイツ語においては「国境」という普通名詞としてはスラヴ語系の *Grenze* によって取って代わられた (中世末期)。「国境のしるし (を定める) → しるし (をつける)」という変化を経て、「刻印が押された金銀ののべ棒」→「マルク」(通貨)、*Marke* 「商標」、*markieren* 「しるしをつける」などに至っている。ただし後の 2 例はゲルマン語

からいったんロマンス語に入ったものの逆輸入語である。swv. (gi)markon「定める」は128行に既出。

764) **Archelâus** : 人名「アケラオ」。ヘロデ大王とサマリア女性との間の子。紀元前4年から後6年まで在位。

765) **helmberandero** : 名詞的現在分詞 helm-berand「兜をかぶっている者、戦士」の複数属格。「戦士」の詩的な言い換え(いわゆるケニング kenning)としてはこの他に、helm-gitrôsteo「兜の同盟者、従士団」が58行に既出。古英語や古ノルド語にもよく見られるゲルマン的表現(『エッダ』では主神OdinがHjalm-beriと呼ばれている)。

768) **Egypti** : 与格。anは次のmanneにもかかる。 **ediliun** : *adj.* 男性単数与格。

769) **that** : 指示代名詞、中性対格。前々行のwordを受ける。 **he** : = godes engil. C写本にはこのheはない。

772) **âhtien** : 704行註を参照。属格目的語をとる。

773) **frêson** : swv. (属格目的語をとって)「害する；つけねらう」。263行に出たfrêsa「危険、危害」の近縁語だが語源不詳。

774) **euua** : iuwaとも。2人称複数giの所有代名詞。 **nu** : 773行のnuとは異って従属接続詞：「今や…なので」。

775) **obarmôdig** : *adj.* obar-môdig「不遜な、倨傲な」(独über-mütig)。 obar-môdとも。この語がラテン語superbia, superbiusの影響でできたとは必ずしも言えないが、この語が否定的意味をもっているのには、教会ラテン語の影響が大きかったであろう。

776) **geriuuide** : swv. gar(u)wian, ger(i)wian「仕度させる」の過去3人称単数。対格再帰代名詞(ina)をともなって「仕度する、準備する」。語源等は273行、595行註に既出。
sniumo : *adv.* 「すぐさま、即刻」。sliumoという語形で137行に登場。

778) **barnu** : 具格。 **lêstun** < lêstianの過去複数。 **thiu berhton giscapu** : 「輝かしい(天の)定め」。367行に既出の表現。

779) **êr** : M写本ではthan。

★ ヘロデ王の死をめぐる描写の中に、ザクセン人の宿敵だったカール大帝の死(814年)の記憶がひそんでいるという説もある(Murphy, p.29)。

〈第10歌章 神殿のイエス〉

さてヨセフとマリアは ふたたびガリラヤにもどった、
天の帝の あの聖なる一家は。

780

そしてナザレの町に住んだ。　そこで救い主キリストは
 その地の民の間で成長し、　叡智に満ちた。
 神の恵みが彼の上にあり、　母方の親族の誰にも
 愛された。　その子は立派さという点で 785
 他のどの男児も比べようがなかった。　彼が12歳の年数を
 数えたとき、　あの時期がやってきた、
 すなわちユダヤの民が　イエルサレムにおいて
 彼らの大いなる神に仕え、　神のお望みになることを
 果たすべき時が。　その時にはイエルサレムにある 790
 かの神殿の中に　ユダヤの人々の
 大群衆が集まったのだ。　そしてマリアも
 みずからその人々とともにあり、　彼女の息子、
 神の御子も母とともにあった。　彼ら、その高貴な人々は、
 彼らの律法が定めているとおりに、　国のならわしのままに 795
 犠牲をささげ終えると、　ふたたびその所を去った、
 勇者たちは、予定のとおり。　ところがその神殿にとどまったのだ、
 強力なる神の御子は。　母親の方はそんなこととは
 本当に知らなかったのであり、　人々とともに先発したと信じていた、
 母親の知友にまじって。　この後、翌日になってはじめて 800
 貴い生まれの女性、　聖なる乙女は
 彼が一行の中にいないことを　知ったのである。
 マリアの心は　心配で満ち、
 胸は悲しみて閉ざされた、　かの聖なる御子の姿を
 人々の間に見出せなかったその時に。　神のしもべである乙女は 805
 嘆き悲しんだ。　かくして再び彼らはイエルサレムにもどった、
 彼らの息子を探すために。　そして神殿の中に座している
 息子を見たのである。　そこでは賢き男たちが、
 非常な英知をもてる者たちが、　律法を読んで、どのようにして
 この世を創造されたお方に対し、　彼らの言葉をもって 810
 讃美をおこなうべきか、　学んでいるところであった。
 その一番中央にいる者たちの中に　神の力強い御子、
 すべてを治めるキリストは座していたが、　この神殿を守る人のだれひとりとして

その子の何者たるかに 気づいてはいないのだった。
 そして子供は 熱意もあらわに賢人たちに 815
 賢い言葉を問うていた。 彼らはみないおかしかった、
 いかなるわけでこんな幼童が そのような言葉を
 みずからの口で発することができるのかと。 母はその人々の中に
 息子が座っているのを見ると、 人々とともにいる我子に、
 賢き人である息子に このような言葉で呼びかけた： 820
 「最愛の子よ、お前は どうして この母に
 こんな悲しいことをする気になったの？ 私はとてもつらい思いで、
 あわれな打ちひしがれた状態で この町の人々の間を
 お前を探し歩いたのだよ。」 するとその子は母にこう答えた、
 賢い言葉をもって：「何ですって、 ぼくがもともと喜んで住むはずの 825
 ところに、
 力強いお父さんが 治めているところに、
 そこにぼくが行っていることは、 もうとくに
 わかっているはずでしょうに。」 そこに居合わせた男たちには、
 神殿の人々には なぜ彼がそんな言葉を口にしたのか
 わからなかったが、 マリアは息子が語ったすべてを、 830
 その賢い言葉の逐一を ひとつも忘れることなく
 胸の奥に収めたのだった。 それから再びヨセフとマリアは
 イエルサレムの町を 後にした。
 主なる神の御子を ともなって。
 これまで人間の母が生んだ ありとあらゆる子供の中で 835
 最善の子を連れて。 彼らはその子に対し
 心清らかに愛情をそそぎ、 神みずからの御子であるその子も
 へりくだった気持をいदैて この近親の者たちに、
 彼の両親に、 いつも従順でありつづけた。
 子供であったその間は 人々に自分の大いなる権力を 840
 知らせようとはしなかったのだ、 つまり自分がこの世に対して
 かくも大きな力を持っているということ。 むしろみずから進んで
 おとなしくこの世の人々の間で 30年の間待ったのである。
 その後はじめて ひとつのしるしを世に示し、

845

人々に、彼こそが この世界における
すべての人の主であることを 語ることになった。

神の聖なる御子は このようにして、言葉も叡智も
あらゆる知識の 最大のものをも、

またきわめて明敏な思いをも 隠しておられたのだった。

850

だれひとりとして彼の語ること、彼の言葉を聞いても
そんな叡智の持主とは、この少年がそんな思いを持っているとは
気づきはしなかった。こうして彼はつつまじやかに輝やかしい
合図を待っていた。いまだその時は至っていなかったのだ、

この地上世界において 自分の身を明らかにし、人々に
信仰の保ちかたと神の意志の実現とを 教えるべき時は。

855

しかしこの国の中には 彼がこの世の光の中に到来したことを
知っていた人は少なくなかった。彼みずからが明らかにする時まで
だれもはっきりと 識ることはなかつたのではあるが。

〔福音書その他との対応〕 780－782行は「マタイ」2章22、23節、782－785行は「ルカ」2章40節、786－789行は同42節、790－792行は説教的補足、793－802行は同43、44節、806－807行は同45節、807－816行は同46節、816－818行は同47節、818－824行は同48節、824－828行は同49節、828－830行は同50節、830－832行は同51節後半、832－839行は同51節前半、840－858行はBedaの「ルカ」註解などによる補足。

〔Tatian との対応〕 11章4節、12章1節－9節まで。

第10歌章 註解

781) **hiuuisiki** : 16世紀に familia という外来語がゲルマン語に定着する以前のこの語の使用については356行註を参照。hêlag hîwiski 「聖家族」 (= Sacra familia) という表現は533行にも登場。

782) **im** : いわゆる「関心の与格」。

783) **uuohs** : < wahsan. **giuuitties ful** : fulが属格目的語をとることについては261行註を参照。giwitは単なる知恵ではなく、キリスト教の理想としての叡智。

784) **an** : was an imu であるべきところ。an と anst, allun に頭韻を踏ませるために文頭に置いたか? **anst** : 独 Gunst との関連については261行註を参照。 **allun** : 複数与格。

785) **môdarmâgun** : stm. môdar-mâg 「母方の親戚」の複数与格。mâg はゴート語 megs

「義理の息子、婿」、古ノルド語 *mágr* 「縁組みによる親戚」を見ると、「義理の親族」が原義だったように思われるが語源未詳。古英語 *mæg* や古高独語 *māg* では古ザクセン語と同じく「親戚一般」となっている。さてこの箇所、イエスが「母方の身内に愛された」と記されていることについては諸説があるが、1) タキトウスが『ゲルマーニア』(20章) で書いているように、ゲルマン人の間では母系制の名残りが強かったこと、2) 新約聖書の記述はヨセフに薄くマリアに厚いが、『ヘーリアント』はいっそうこの傾向が強いこと (438 行註参照)、などが理由として考えられる。

786) **gôdi** : *f.* 「立派さ」(独 *Güte*)。 **gértalo** : *stn.* *gér-tal* または *stf.* *gér-tala* 「年数」(独 *Jahreszahl*) の複数属格。類似表現として *thes gères gital* が 198 行に、*wintargital* または *wintro gital* が 725 行に既出。

787) **tuuelibi** : 数詞 *twelif* が名詞として *i-* 変化したもの。

789) **thiodgode** : 「万民の神」。単数与格。 *thiod-* の意味については 285 行註参照。

792) **mancraft** : *stf.* *man-kraft* 「多故、多勢」。「多勢」の意の *kraft* は既に 415 行に登場。

793) **an gisídea** : *stn.* *gisídi* 「多くの人々、一族の人たち」の語源等は 185 行註に既述。

795) **êuua** : *stm.* *êo* 「律法」の単数与格。307、529 行註を参照。 **gibôd** : *gi-biodan* の自動詞的用法「命じられている」。529 行に既出。

796) **gilêstid** : 794 行末の *habdun* と結ぶ過去分詞。 **landuuisun** : *stf., swf.* *land-wisa* 「その国の流儀、風習」の(弱変化)単数与格。 **im** : *faran* はしばしば与格再帰代名詞をとともなう。

797) **afstôd** : < *af-stân* または *af-standan* 「居残る」。

798) **sô** : 結果を示す(独 *so daß*)。

799) **ni uuiſsa** : 前行の *ina...thar* と結んで「彼がそこにいるとは知らず」。

800) **friundun** : 「愛する者」という原義(410 行註)から、ここでは「親戚、縁者」。

803) **Mariun** : 与格。

804) **hriuuig** : 722 行に既出。

805) **gornoda** : < *swv.* *gornon* または *gnornon*, *grornon* とも。「嘆き悲しむ」。語源未詳。擬音語か？

807) **sôkean** : 目的的不定詞(独 *um zu suchen*, 英 *in order to seek*)。

808) **the uuiſa man** : 複数だから *wisun* のはずで、事実 C 写本はそうになっている。

810) **lâsun** : *stv.* (V) *lesan* 「読む」(独 *lesen*) の過去複数。「読む」といっても恐らくは音読だったろう。ラテン語 *lego* 「拾い集める；読む」の翻訳語であり、*lego* と同じく「拾い集める」が原義(独 *Aus-lese* など)。「文字をひとつずつ目で拾い、それを音読する」ことだったが、印刷術の発展とともに黙読に転じたと考えられる。 **lînodun** : *swv.* *lînon* 「学ぶ」(独 *lernen*, 英 *to learn*) の過去複数。原義は「(前人の)足跡をたどる」で、*lêstian* (独 *leisten*), *lêrian* (独 *lehren*)、現代独語の *Gleis* 「軌道、レール」などとも同語源。

811) **them** : 指示代名詞、男性単数与格で関係代名詞 *the* の先行詞。 **giscôp** : < *stv.* (VI) *giskeppian* 「創造する」 (独 *schöpfen*, 英 *to shape*)。

812) **undar middiun** : *adj.* *middi* 「まん中にある、中央の」の名詞化複数与格。つまり厳密には「中央にいる人々の間に」の意であるが、ほとんど「人々のまん中に」に近い。

813) **sô is thea ni...uuiht** : 「ところが彼らはキリストについて (*is*) 何ひとつ…なかった」。*thea* は賢者たちを指す指示代名詞であり、同時に次行の関係詞 *the* の先行詞。

814) **thes uuîhes** : *wardon* の属格目的語。

815) **frâgoda** : 人の対格 (*sie*) と物の属格 (*wisera wordo*) をとる。 **firiuitlico** : *adv.* *firi-wit-liko* 「知識欲旺盛に」。 *stn.* *firi-wit* 「知識欲、好奇心」の *adv.* 原義は「前もって (*firi*) 知ること (*wit*)」であるが、後には「(必要以上に) 先ばしって知りたがること」のような否定的意味を帯び、現代独の *Vorwitz* 「(不謹慎な) 好奇心、出すぎ」やその *adj.* *vorwitzig, fürwitzig* などに至っている。

816) **uuîsera uuordo** : 複数属格 (*frâgon* の目的語) : 「(賢者たちの) 賢い言葉を求めて」。

817) **quidi** : *stm.* 「言辞、言説」の複数対格。116行に初出の *stv.* *quedan* 「言う」の名詞。

818) **mûdu** : *mûd* (独 *Mund*, 英 *mouth*) の具格。 **gimênean** : *swv.* (*gi*) *mênian* 「思う; 話す」 (独 *meinen*, 英 *to mean*) の不定形。

819) **grôttâ** : *swv.* *grôtian* 「声をかける」 (独 *grüßen*, 英 *to greet*) の過去。 *stv.* *griotan* 「泣く」と同根で、原義は「(相手に) 声を発せしめる」だったらしい。古英語や古高独・中高独語では「挑発する; 攻撃する」の意味もあり、決して単なる「挨拶」の域にとどまるものではなかった。

820) **uuîsan** : 前行の *iro sunu* にかかる *adj.* または名詞化「賢者」で、*sunu* の同格説明と名けてもよい。単数対格。

821) **liobosto** : 呼びかけ。 *manno* の *man* は「人間」の意で「男」ではあるまい。

822) **gisidon** : *swv.* 「(ある人に) ある仕打ちをする、おこなう」。ゴート語や古高独語に「遂行する」の意で、古英語に「決める」の意で同根と思われる動詞が存在するが、それ以上の語源は未詳。 **sêragmôd** : *adj.* *sêrag-môd* 「つらい思いで」。 *sêrag* は747行に既出の *sêr* 「痛い、つらい」 (♀独 *sehr*, 英 *sore, sorry* 等) と同根。

823) **armhugdig** : *adj.* *arm-hugdig* 「哀れな思いの」。後半 *-hugdig* は *swv.* *huggian* の過去分詞からできた接尾辞。 **êskon** : *swv.* *êskon* 「尋ね求める」 (英 *to ask*, 独 *heischen* 「要求する」)。独 *heischen* の *h-* は *heißen* に影響されて後についたもので、古高独語では *eiscôn*。

824) **burgliudiun** : *stm.* (複) *burg-liudi* 「城下町の人々」の与格。ここでは「イエエルサレムの町の人々」の意。

825) **huuat** : 問投詞「まったく、実に、確かに」 (556行に初出)。

★792行以下この箇所に至るまで、またもや父ヨセフの不在が目立つ。「ルカ」(2,41) では常に

「両親」と記されている箇所も、あたかもマリアひとりがそこにいるかのように書かれている。マリア崇拝の進展がうかがえる。

826) **thar, ...thar** : 前の **thar** は *adv.*, 後の **thar** (827 行も) は関係副詞。 **girisu** : *stv.* (I) (gi-)risan 「妥当である、ふさわしい; ...に属する」の現在 1 人称単数。(gi)riisan は現代英 *to rise, raise* と同系で「身を起こす」が原義。「動く、移る」を経て独 *reisen* 「旅をする」にまで至る。 **birehton** : 「正当性をもって」。 **rehton** は *stn. reht* 「正義、権限; 義務」(独 *Recht*, 英 *right*) の複数与格。

831) **gibarg** : *stv.* (IV) gi-bergen 「収める; 隠す」(独 *bergen*) の過去単数。原義は「安全なところ (=Burg, Berg) に保管する」。

832) **uuisaro uuordo** : 前行 *sô huuat sô* と結ぶ属格。

★「ルカ」(2,50) には「しかし両親にはイエスの言葉の意味がわからなかった」とあるのを詩人は故意に無視する。これもマリア崇拝のプロセスのひとつだろう。

834) **te gisidea** : 「同行者、同伴者として一をともなって」。534 行に既出。

835) **thero the** : **thero** は *allaro barno* を先行詞とする関係代名詞複数属格、**the** は *bezta* を受ける関係代名詞単数主格。次行 *magu* は **the** の補足で「息子として」の意。

836) **im...tô** : 「彼に対して」

838) **gadulingmâgum** : *stm. gaduling-mâg* は 221 行に、*mâg* は 785 行の *môdar-mâg* に既出。ここでは「両親」の意であることが、次行の *aldron sinun* によってわかる。

840) **kindiski** : *f.* 「少年期」(独 *Kindheit*) の単数与格。

841) **mârean** : *=swv. mârian* 「告げ知らせる」。539 行に既出。 **megin** : *stn.* 「力、能力」、印欧祖語 * *magh-* に由来し、*mugan* (独 *mögen*, 英 *may*), *maht* (独 *Macht*, 英 *might*) などと同系。 **êhta** : *egan* の過去単数。

842) **bêd** : < *bidan*. 103 行に既出。ここでは与格再帰代名詞 *im* をともなっている。

843) **githiudo** : *adv.* 665 行に既出。 **gêro** : 数詞につく複数属格。

848) **uuisdôm** : *stm.* 「叡知」(英 *wis-dom*, 独 *Weis-heit*)。接尾辞 *-dôm* については 490 行の *dôm* の註を参照。 **giuuitteo** : *mêst* にかかる複数属格。

849) **tulgo** : *adv.* 「非常に」。ゴート語 *tulgus* 「堅固な」と同根。古英語と古サクソン語には見られるが、高地ドイツ語には存在しない。語源未詳。 **is** : 次行 *that* 以下を先取りする人称代名詞 *it* の属格。 *giwar* が属格目的語を要求するから。

850) **giuuar** : *adj.* 「気づく、認める」(独 *ge-wahr*, 英 *a-ware*)。 *werðan* および *wesan* とともに用いられ、属格目的語をとる。「用心、防衛」の *stf. wara* の関連語で、300 行に註記した *giwardon* 「注意する」、*waro-liko* 「用心深く」なども同系。

851) **thegan** : 前行 *he* の同格説明語。 **githâhti** : *stf. gi-thâht* (独 *ge-danke*) の複数対格。

852) **torhtaro tēcno** : *bidan* の目的語である複数属格。

853) **ina** : 再帰代名詞対格。

854) **lêrian** : *swv.* 「教える」(独 *lehren*)。現代独 *lehren* と同じく、人と物の目的語を対格にとる。810行の **linon** (独 *lernen*、英 *to learn*) と同じ関係にあり、原義は「(前人の) 足あとをたどらせる」。**gilôbon** : *swm.* *gi-lôbo* の単数対格。

856) **aftar** : 「...の中のアチコチで」。

857) **cûdlico** : *adv.* 「はっきりと」。 *adj.* *kûd* (独 *kund*)、*swv.* *kûdian* (独 *ver-künden*) の関連語。**ankennian** : =ant-kennian.

858) **ina...seggean** : 「みずからを(キリストであると)告知する」。

★840行以下18行は福音書にはない自由な補足文である。「ルカ」(2,52) では「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人ともに愛された」とあるのみ。12歳の時の「神童」ふりに比して、その後長いあいだ30歳に達するまで何の目立った事蹟もないことが、『ヘーリアント』作者には物足らなく思われ、何らかの説明を入れる必要を感じたのであろう。BedaやHrabanusの聖書註解も「30歳にしてバプテスマを受け、その後教えはじめ...」という補足をこのあたりにほどこしている。